

昭和 49 年の災害

町の災害史を書き変えた「七夕台風」 —内海町で29人が犠牲に—

台風8号による昭和49年7月6日から7日にかけての集中豪雨は内海町の東部地区を中心に起きたため、隣町であった池田町には人的被害は発生していない。しかし、内海町では橘地区などで発生した土石流などにより、消防団員1人を含む29人が犠牲となった。

7月7日は参議院議員選挙が予定されていたが、浸水被害などで投票所の変更を余儀なくされた地区もあり、混乱が生じた。「七夕災害」とも呼ばれた同災害については、内海町を中心に詳細に記述する。

台風に刺激されて大雨となった四国地方の梅雨前線

昭和49年6月26日、マリアナ群島東方海上に発生した台風8号は、発達しながらゆっくりと北西に進み、最盛期は7月5日朝、沖縄の西方約200キロメートルの海上にあった頃である。

一方当地方は、6月29日以降西日本一帯を覆っていた梅雨前線により、毎日降ったり止んだりの典型的な梅雨模様になっていた。

台風はその後、少しずつ衰えながら毎時20キロメートルのゆっくりした速度で北北東に進み、福岡の西約200キロメートルの海上に達した7月6日24時には、中心気圧970ミリバール、最大風速30メートルという中型の並台風となっていた。しかし、台風が九州西方海上をゆっくりと北北東に進んだ6日は、朝から台風周辺の暖かく湿った空気が日本海の梅雨前線を刺激し、四国地方は大雨となった。

わずか1日で年間雨量の4分の1が降った 記録的集中豪雨

7月6日、日中は比較的全域に降っていた雨は夜になって局部的になり、特に小豆島、東讃、徳島県東部では、数時間にわたって毎時40ミリ～70ミリと、記録的な集中豪雨となった。内海町の太陽の丘では、6日9時から7日9時までの24時間

の最多雨量365ミリを観測した。昭和44年から48年までの内海町における平均年間降雨量は1,232ミリであることから、年間雨量のおよそ4分の1がたった1日で降った計算になる。

真夜中の豪雨に停電が重なり、 避難時の混乱に拍車がかかる

7月6日午後2時の大雨強風波浪注意報発令により、消防各分団の招集が相次いだ。この頃から各地から浸水、崖崩れの知らせが入るようになり、夕刻には福田の森庄川、午後9時には田浦川、続いて橘川など河川の氾濫が相次いだ。

午後9時10分に大雨警報、洪水強風波浪注意報が出された。安田大川付近、草壁別当川流域、苗羽馬木地区、橘地区、福田尾崎、岡地区に避難命令が出され、住民の避難が始まった。

雨脚はさらに強くなり、太陽の丘観測所で計測された午後9時から10時までの時間降雨量は92ミリを記録した。消防庁舎前や役場付近の水かさが増して、午後10時には停電となり、内海・福田間の電話が不通になった。

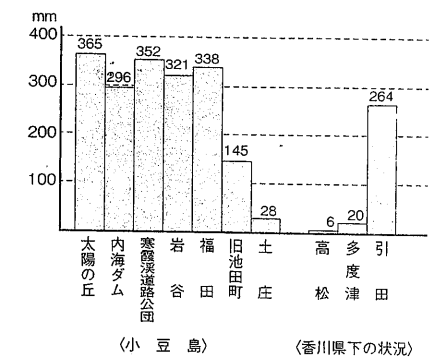
河川の氾濫と満潮時が重なり、安田、苗羽地区では浸水家屋が続出した。ため池の決壊も相次ぎ、道路の寸断で孤立する地域も始まった。午後11時45分には町内全戸停電となり、混乱に拍車がかかった。

橘地区をはじめ急傾斜地の多いところで、土石流が発生

被害範囲は全町にわたり、海岸線が15キロメートルに及ぶ東浦地区では、集落を結ぶ唯一の県道がいたるところで寸断され、加えて電話の不通、停電により、特に福田地区ではまったくの孤立状態となった。

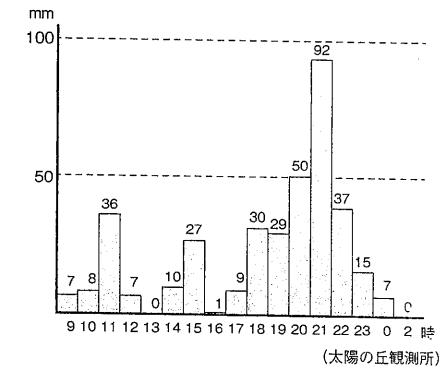
橘地区をはじめ、急傾斜地が多い東部海岸の岩谷、福田、吉田地区では、鉄砲水となって土砂崩れが起り、瞬時に住家を押し流した。このうち橘地区では6日午後11時50分頃、通称金月山が轟音とともに崩壊、520立方メートルの土砂が住宅に

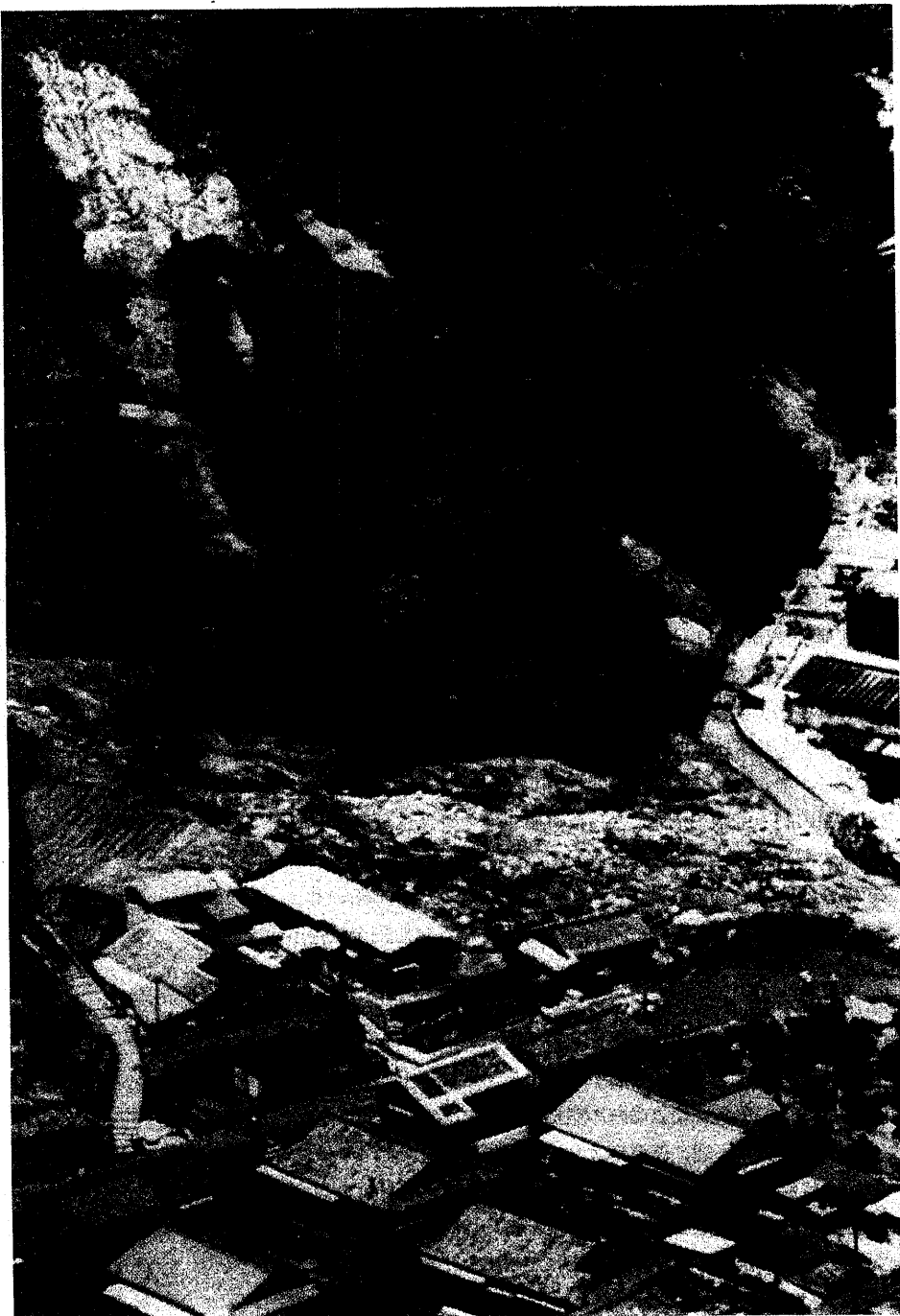
■台風8号 降雨量



■台風8号 時間雨量

7月6日 (6日9時～7日2時)





橋地区の土砂崩れ

流れ込み、27人が土砂に巻き込まれた。

知らせを受け、すぐに小豆島消防署内海分署職員9人がダンプカーで出動したが、橋峠上がり口の古郷池付近で石と土砂に行く手をはばまれ、やむなく倒木と泥土の中を徒歩で進み、5キロメートルの道のりを1時間半をかけて現地に到着した。

現地で県警第一機動隊35人と合流し、ただちに救助活動が開始された。

7月7日午前2時すぎに4遺体が発見されたのを最初に、同日夜までに18遺体が発見された。民家を押しつぶした土砂を取り除くショベルカーに捜索隊員の目が注がれ、湾内でも不明者の捜索にあたった。

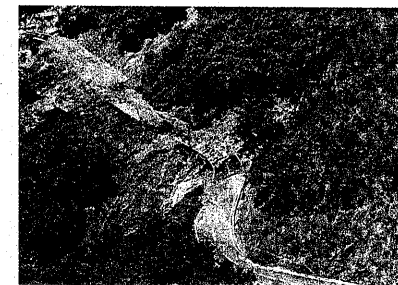
橋湾などに県警の警察船「やしま」、同機動隊のアクアラング隊、海上自衛隊呉警備隊第一掃海隊水中処分掃海艇「はしま」など4隻、17人のアクアラング隊員に地元の漁船も出動して、海での行方不明者の捜索が行われた。

日を追って4体、2体、1体、2体と遺体発見が続き、福田地区で消防活動中に殉職した男性も12日に発見された。

福田地区伊豆川付近で犠牲となったこの消防団員は、6日深夜、降雨が激しくなったために、他の団員とともに自宅近くの伊豆川を警戒中に土石流に巻き込まれたもので、遺体発見のきっかけとなったのは懐中電灯だった。懐中電灯が汚泥の中から見つかった場所から50メートルほど上流の民家の庭で、ヘルメット、消防団員服姿の遺体が発見された。

避難する途中に濁流にのみこまれた福田地区の女性は、生後3カ月の娘をしっかりと遺体の胸に抱いており、人々の涙を誘った。

最後の遺体が岩谷地区で発見されたのは、災害発生から7日後の13日である。



通行不能となった橋峠



橋地区海上からの捜索活動



岩谷地区での救助活動



福田地区救助活動

救援や復旧を阻み、東部海岸地域を孤立化させた 道路や通信の不通

7月7日午前4時、県から陸上自衛隊普通寺駐屯地に災害派遣要請がなされた。

午前5時に金子知事を本部長に県災害対策本部が設けられ、県小豆島事務所に現地対策本部が設置された。

県警機動隊員、消防団員、地元住民らに続き、陸上自衛隊、県警、県職員らが救援にかけつけ、8日には海上自衛隊も救援活動に参加した。

また7日午後には、池田町、土庄町の消防団が橘地区へ応援に入った。

陸上自衛隊普通寺駐屯部隊は、災害発生と同時にのべ50台の車両、大型機材を搬入し、多い日で450人、のべ3,100人の隊員が橘、福田、岩谷などで行方不明者の捜索、復旧作業にあたった。

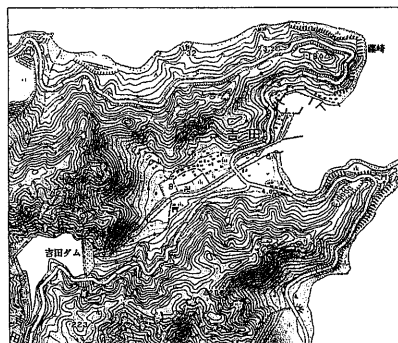
陸上自衛隊は、作業の完了にともなって12日午後から一部の撤収を開始、15日にすべて撤収した。また、海上で行方不明者の捜索にあっていた海上自衛隊呉第二駆潜隊は15日に撤収した。

普通寺駐屯地部隊から派遣され、復旧作業に尽力した自衛隊員の中には、この災害で妹を亡くし、母親が重傷を負った隊員も含まれていた。被害に遭った2人は避難の途中、橘地区の川に転落し、妹の遺体は11日に海岸で発見された。

県災害対策本部が設けられ、 各方面の救援活動や捜索が開始された

東浦方面を中心に大災害となり、安田・苗羽地区では浸水家屋が続出した。急傾斜地区が多い東部海岸の橘・岩谷・当浜・福田・吉田地区では鉄砲水となって土砂崩れが起き、瞬時に住家押し流し、多数の犠牲者を出した。

ことに道路の通行ができなくなったうえに通信機能もマヒし、事実上孤立状態となった福田地区の住民は、二次災害の恐怖におびえながら、救援隊を待つしかないという、長く苦しい時間を過ごさざるを得なかった。死亡者の検証や負傷者の応



■吉田地区



橘地区土砂崩れ

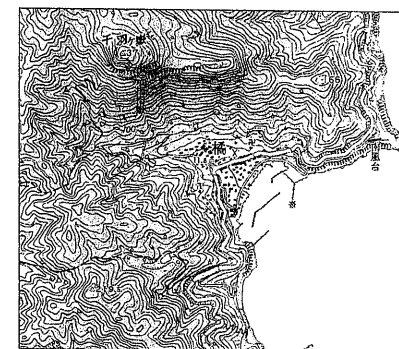
急手当てをしようにも、医師は不在である。ようやく作業用車両が通れるようになったのは災害から2日後の7月9日だった。

死者は橘19人、岩谷2人、福田6人、安田2人の計29人。重軽傷者41人。全壊家屋57戸、半壊71戸、非住家全半壊79戸、床上浸水1,081戸、床下浸水855戸である。

土木被害は道路22か所、橋梁14か所、河川54か所におよび、農林被害、商工水産被害、環境保健被害、文教施設被害など、被害総額は34億円にのぼった。

「崩壊危険地帯」に指定され、防災工事の必要がありながら、国庫補助防災事業の採択基準にあわず、擁壁や水路設置の工事がなされていなかった災害現場もあった。

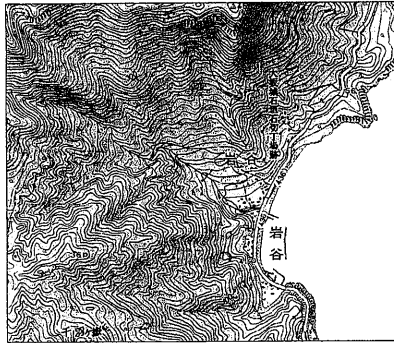
最大の被害となった橘地区は、県による崩壊防止工事が進められていた矢先の災害となった。同地区の危険区域は1.8ヘクタールで、特に危険な急傾斜地は勾配30度、延長300メートル、高さ



■橘地区



■福田地区



■岩谷地区

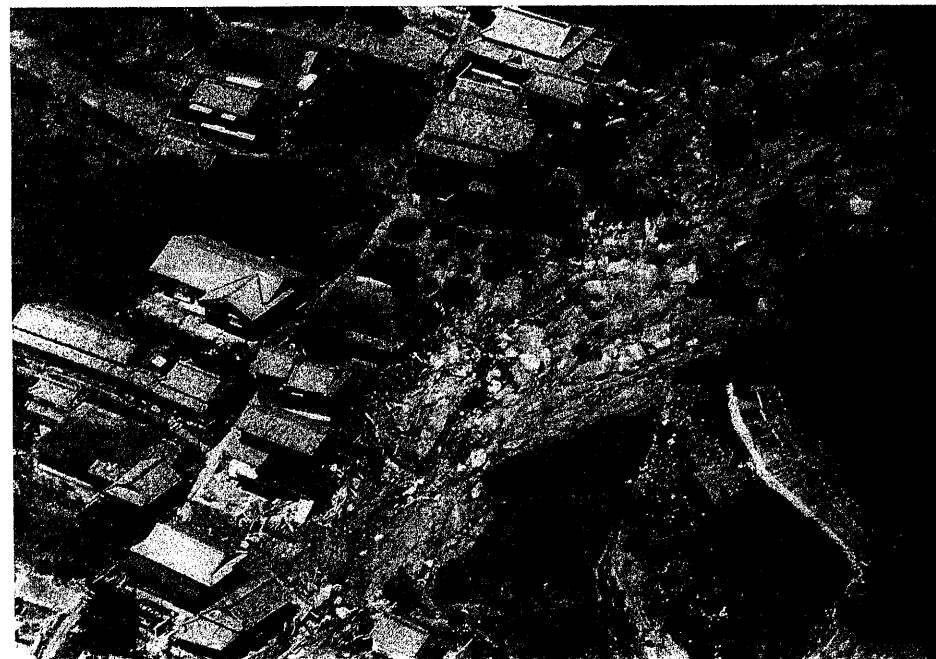
10メートルにわたる0.5ヘクタール。延長342メートルをコンクリートや石積みなどで補強する工事は51年度完成予定で、7割近くの約210メートルまで施工がすすんでいた。

主な地区での被害は以下のとおりである。

- ・橋 急傾斜の多いこの地区では3か所で土石流が発生し、死者19人を出した。
- ・福田 伊豆川が決壊したため川が増水して、巨石を押し流した。死者6人。8日夕刻まで道路は切断され、停電、電話不通も加わって孤立状態になり、海上からの救援が主となった。同地区では昭和6年にも伊豆川が氾濫し、死者7人を出しており、43年ぶりの悲劇となった。
- ・岩谷 椎木川の氾濫と天狗山からの土砂が崩れ、国指定文化財の大阪城残石が多数押し流されたことが被害を拡大した。死者2人。うち1人は川の



岩谷地区の土砂崩れ



岩谷地区の土砂崩れ



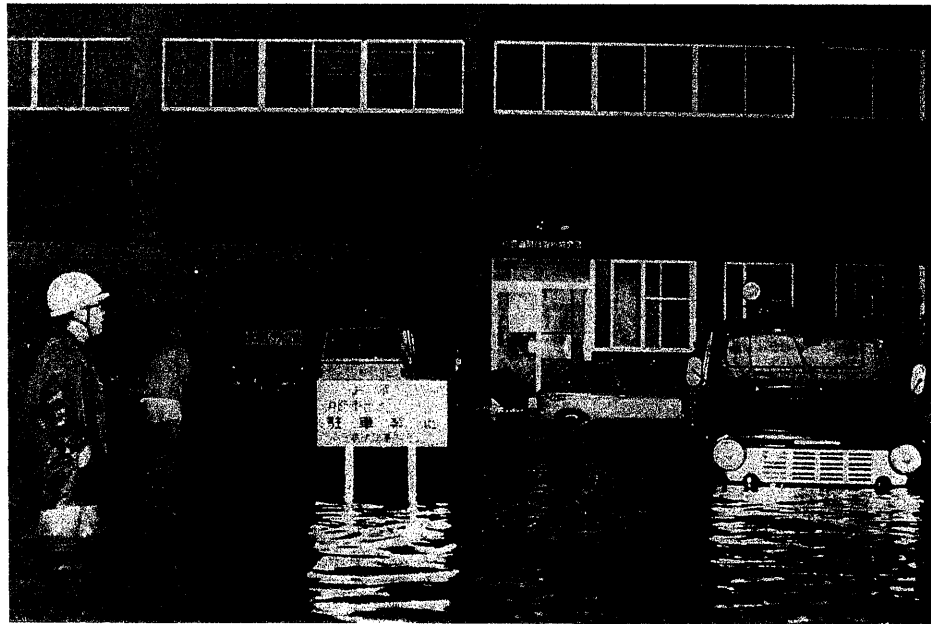
埋没した水田（安田地区古郷）



土砂で埋まった木庄川（木庄地区）



土砂で埋まった安田大川（安田地区八軒屋付近）この付近は護岸の高さが2メートル、幅は7メートルあった。



安田（植松地区）および苗羽（馬木地区）はほとんどの世帯が床上浸水となった。

異常増水のため避難する途中、橋の途中で巨石をともなった土石流に押し流された。

・安田 安田大川は土砂、流木などで埋まる。諸口川5号橋が落ちた。植松地区では床上浸水。死者2人。

・木庄 夫婦池の上池1か所、下池2か所でえん堤が決壊。木庄川は土砂で埋まる。

再びの雨と、不正確な情報に動揺した住民

内海町を中心とする被災地では、7月6日午後10時頃から停電となったが、8日午後3時、福田地区を最後に全面復旧した。

8日、9日と晴天となったが、11日未明から再び雨が降り出した。10日夜、高松地方気象台から大雨・雷雨注意報が出された。数日前の大雨で地盤はゆるんでおり、再び山崩れや浸水の恐れがあるとして、橋地区の住民70人は避難所で一夜を過ごした。岩谷、福田地区でも住民は知人や親類を頼って避難した。

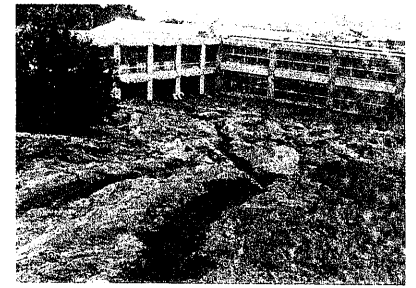
11日から授業再開の予定だった学校は再び全面休校となり、連絡道崩壊や河川氾濫など二次災害の恐れが出たため、県警機動隊員100人、陸上自衛隊420人、地区消防団、住民らが、排水路整備や土のう積みなど河川整備に力を注いだ。

岩谷、橋地区では二次災害発生に備えて機動隊、自衛隊員らが待機したほか、現地対策本部ではマイクロバス2台を待機させ、万一の場合に備えた。

福田地区では自衛隊員120人が出動して伊豆川の水路を整備するとともに、行方不明者の捜索を行った。

町簡易水道の水源地になっている安田地区の三五郎池が満水状態であったため、11日午前中に堤防決壊の噂が流れ、住民の避難騒ぎが一時起きた。

このように「避難命令が出た」などの流言飛



裏山の土砂崩れにより、校庭が埋まった（星城小学校）



タンカに乗せられて救助される負傷者



土砂で埋まった三五郎池



熱気の中で炊き出しをする婦人会の人たち(学校給食センター)

語が飛び交ったため、県広報車が「正式連絡は広報車と公民館放送で行う」と巡回、町民に冷静な対応を呼びかけた。

いち早く開始された炊き出しと給食活動

災害後、各地区の婦人会が中心となって、被災者や救護活動に従事する人々への炊き出し作業を開始した。この時、炊き出しを行った施設は、給食センター、福田公民館、当浜公民館、岩谷公

民館、橘隣保館、安田小学校、安田自治会館木庄分館、馬木真光寺、坂手公民館の9か所である。

給食センターでは、朝早くから駆けつけた婦人会のメンバーが、休む間もなく、朝昼晩の3食のおにぎりを用意した。島内の土庄町や池田町の婦人会からも、1週間でのべ207人が応援に駆けつけた。

炊き出しが長期にわたったため、おにぎりばかりではとの声もあり、とりあえず手持ちの材料を使い、その後は救援物資も次々と届いたため、県の生活改善普及員の協力も得て、食事の内容、栄養のバランスなどにも気を配った給食活動が行われた。

炊き出し、給食活動は6日から20日までの15日間にわたり、のべ27,692食、婦人会をはじめとするのべ1,211人の奉仕活動によって行われた。

投票所への浸水などで、参議院議員選挙にも影響

7月7日の日曜日は参議院議員選挙の投票日でもあった。大きな災害に見舞われた小豆島でも、復旧作業の合間を縫って一票を投じる姿が見られたが、浸水被害などにより投票所の変更を余議なくされた会場もあった。

内海町安田第一投票区の投票所となっていた内海町公会堂が浸水のため内海町役場に、同町安田第三投票区の橘集会場が橘幼稚園に変更された。

当初の予定どおり、投票は午前7時に開始された。

町内最大の被害を出した橘地区の6投票所は、道路寸断で陸路での投票箱運搬が不可能となったため、災害救援で出動中の巡視船で、開票場である町役場へ届けられた。このため、開票時間は予定より1時間遅れの9時半からとなるなど、影響もみられた。

(応急対策)

3年分に相当する膨大な堆積土砂とゴミをどうするか

被災の報道とともに県内外より駆けつけた奉仕活動の人々も加わり、全町をあげて復旧作業が開始された。

倒壊、浸水家庭より排出されたゴミ、ヘドロは約3万トンと、町の平常の収集量の3年分にもおよんだ。

一方、市街地に堆積された土砂は約17,800立方メートルに達し、これらのゴミ、堆積土砂とともに、災害復旧工事により排出される土砂約175,000立方メートルの対策として、苗羽地区(15,146平方メートル)と草壁地区(6,026平方メートル)の2か所で埋立が着工され、苗羽地区は主として地場産業の工場用地や公共用地に、草壁地区は海岸緑地として計画された。

手のつけようがない中で優先されたし尿収集、防疫対策

災害後の最も急を要する保健活動として、ゴミ処理とともに、し尿収集、防疫活動も浸水地区全域にわたって実施された。

し尿収集については、土庄町および高松市清掃連合会の協力により、7月17日までにバキューム車のべ67台、作業延人員191人によって、収集処理することができた。

防疫活動も、県農業改良普及所をはじめ各団体の奉仕活動が実施され、動力噴霧機等機械類のべ72台、作業人員のべ254人により、橘、岩谷、吉田、福田などの被災地区を中心に、消毒剤の散布や、消毒用の消石灰、クレゾール、塩素剤などの家庭への配布を行った。また、伝染病予防のためのチラシを家庭に配り、注意を呼びかけた。

福田地区では、内海町の要請により、土庄保健所職員4人による防疫班が伝染病予防の指導を始めた。

井戸水についても各消防分団の協力により、浸水地区の井戸替え、消毒に加え、土庄保健所による飲料水の検査を実施した。

また検病対策として、内海の被災家庭に保健婦を派遣した。15、16日の両日は土庄、高松両保健所などの保健婦17人も加わり、浸水家庭約2,700戸を中心に個別訪問を行い、伝染病予防などを指導した。日赤、県立中央病院、離島巡回診療船「済



道路にはき出されたゴミの山

生丸」などによる診療活動も行われた。

水害に遭ったのに水がない皮肉、 隣町から給水車による救援を受ける

三五郎池の水道施設が損壊したため、坂手地区の全域をはじめ、上水道需要世帯の約半数が断水した。簡易水道も6施設の全てが導配水管の破損により断水状態となった。

復旧については、県より技術者の応援を求めるなどして、漸次導配水管の仮布設を急いだ結果、7月11日より全面通水することができたが、水源のにごりのため、浄化能力が極度に減退し、坂手地区をはじめ高台では7月17日まで断水が続いた。多くの人々の奉仕による給水活動が行われ、橘地区では土庄、池田両町からの給水車が給水活動を行った。

被害の大きかった橘地区の簡易水道が完全復旧したのは、7月22日であった。

とにかく住むところを—— 急がれた仮設住宅の建設

家屋の倒壊などで家を失った住民のために、国および県による応急対策としてプレハブ住宅仮設44戸と旧学校改築7戸を行い、7月27日までに入居をすませた。仮設のプレハブ住宅は一戸あたり約30平方メートルの2DKである。

内訳は安田地区5、橘地区32（うち旧学校改築4）、岩谷地区7（うち旧学校改築3）、福田地区7。

子どもたちの教育を守るために行われた、 さまざまな学習・通学方法

・安田小学校（7月8日～7月16日）

橘地区では教師2、3人が児童家庭を訪問し、家庭学習を実施した。

岩谷地区では地区公民館で出張授業が行われた。

スクールバス開通により、7月17日から平常授業となる。

・福田小（中）学校（7月8日～7月20日）

当浜地区では8日は徒歩で通学、9日から民間のマイクロバスで通学した。

吉田地区の子どもたちは自家用車で送迎が行われた。

・内海中学校（7月8日～7月20日）

橘・岩谷地区では、教師がそれぞれの地区へ出向いて、家庭訪問による家庭学習を実施。16日より徒歩、自転車の一部登校する。

・旭幼稚園（橘地区）

裏山からの土砂流入により、8日から16日まで休園。

住民のこれからの暮らしを築くために 施行された施策

特別生活相談が7月9日から内海町役場で始まった。これは被災住民の各種相談を受けるとともに、災害で手薄になった行政の強化を図ることを目的に行われたもので、県の住宅管理課、商工課、環境公害対策室、社会課、農政課などから15人の幹部職員が、住宅、保険、金融などについて住民の相談に応じた。

また、7月19日～9月30日まで町民相談室が開設され、相談件数は492件におよんだ。災害復旧関係の相談が多くを占めたほか、援護資金や住宅貸付資金に関する相談が相次いだ。

また災害救護資金として、278件、7,144万円が貸し付けられたほか、町民税などの減免措置も実施され、災害で大きな被害を受けた町民の生活を援助するための取り組みが進められた。



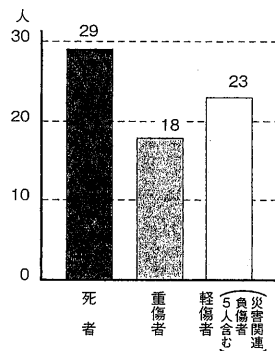
旧橋小学校運動場跡に建てられた応急住宅

■応急仮設住宅建設状況

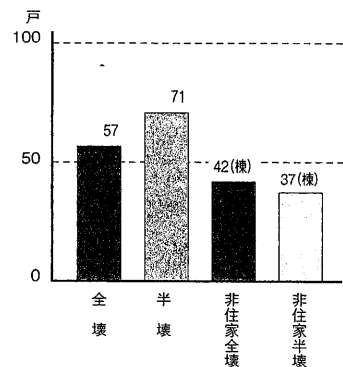
| 戸数 | 安田 | 橘 | 岩谷 | 福田 | 合計 |
|--------|----------|----------------|--------|-----|----|
| プレハブ住宅 | 5 | 28 | 4 | 7 | 44 |
| 旧学校改築 | 0 | 4 | 3 | 0 | 7 |
| 建設場所 | 植松馬場の神社地 | 旧小学校及集会場空地・民有地 | 旧小学校空地 | 民有地 | |
| 地区別合計 | 5 | 32 | 7 | 7 | 51 |

データでみる 昭和49年の被害の状況

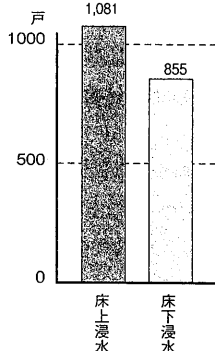
■人的被害



■建物被害(倒壊)



■建物被害(浸水)

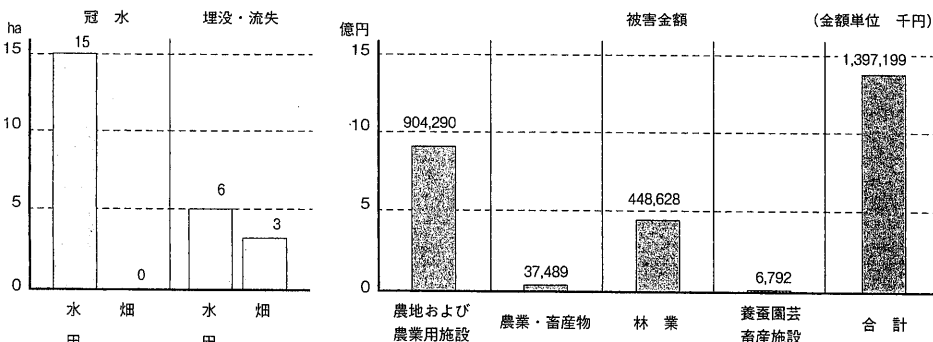


■土木被害

(金額単位 千円)

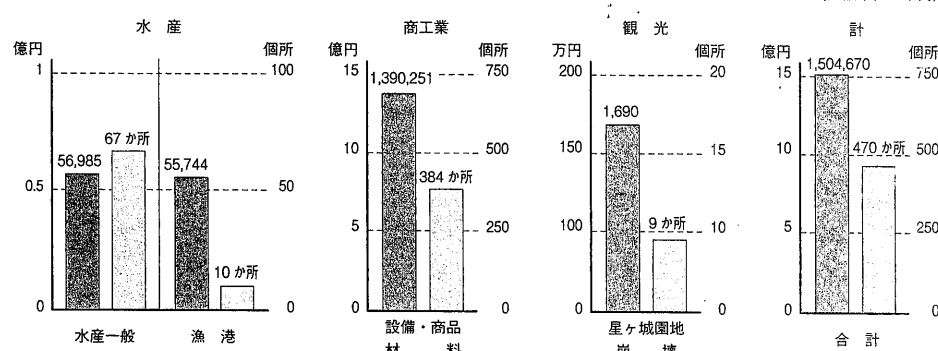
| | 道路 | 橋りょう | 河川 | 砂防 | 合計 |
|-----|----------------------|--------------------|---------------------|---------------------|----------------------|
| 内海町 | 金額 50,151 個所 22 | 金額 26,397 個所 14 | 金額 375,954 個所 54 | 金額 452,502 個所 90 | 金額 884,944 個所 176 |
| 香川県 | 金額 242,528 個所 127 | 金額 9,177 個所 4 | 金額 145,787 個所 32 | 金額 8,479 個所 2 | 金額 405,971 個所 165 |
| 計 | 金額 292,679 個所 149 | 金額 35,574 個所 18 | 金額 521,741 個所 86 | 金額 8,479 個所 2 | 金額 858,473 個所 255 |

■農林被害



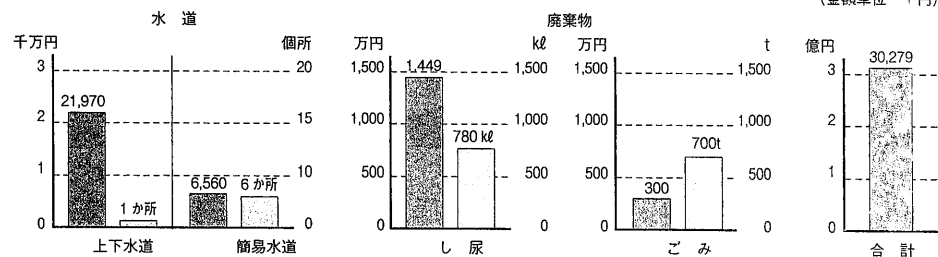
■商工水産被害

(金額単位 千円)



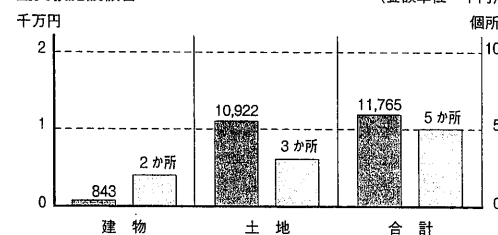
■環境保健被害

(金額単位 千円)

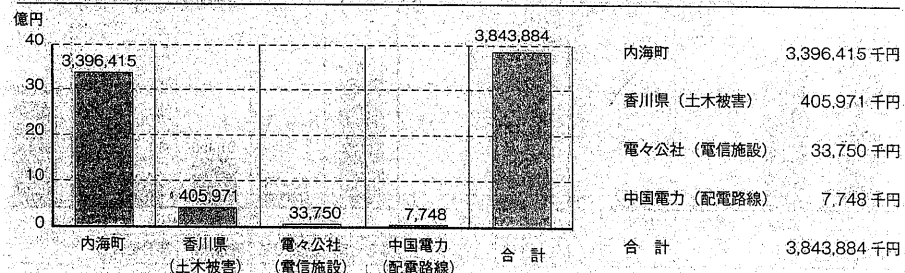


■文教施設被害

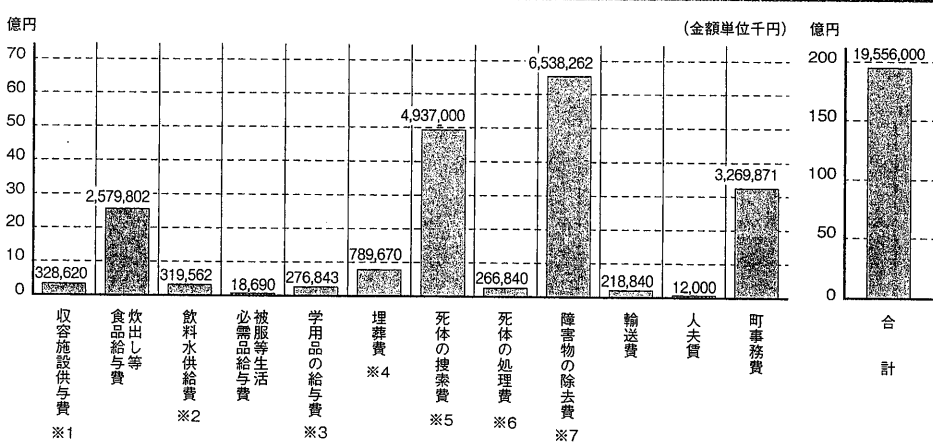
(金額単位 千円)



被害総額



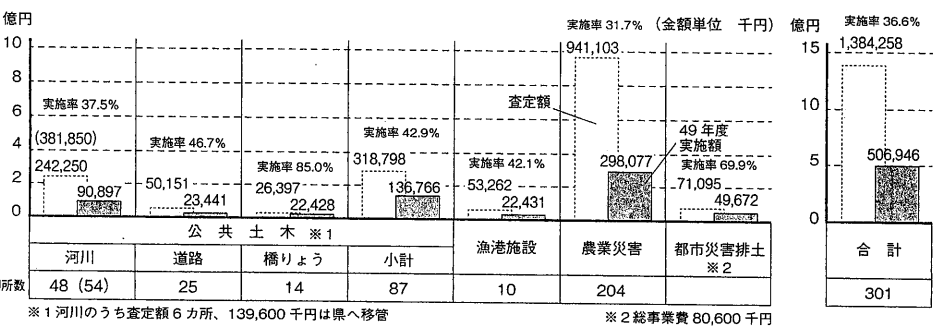
災害救助費



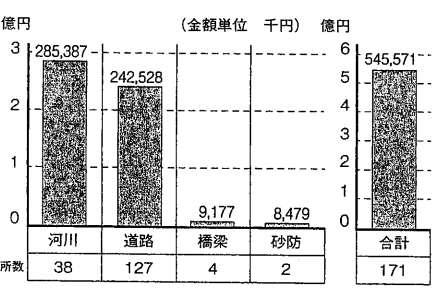
適用 ※1 避難所9カ所、毛布、カーペット他 ※2 給水車借上料、燃料費他 ※3 小学生104人、中学生66人
 ※4 棺代、ドライアイス他 ※5 重機借上料、船借上料 ※6 検案料、毛布他 ※7 重機借上料、燃料、人夫賃他

復旧工事の状況

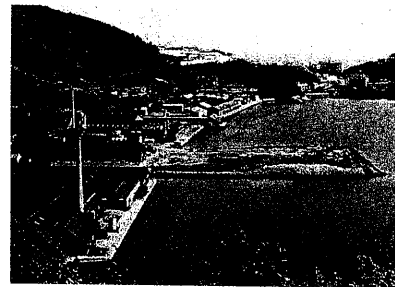
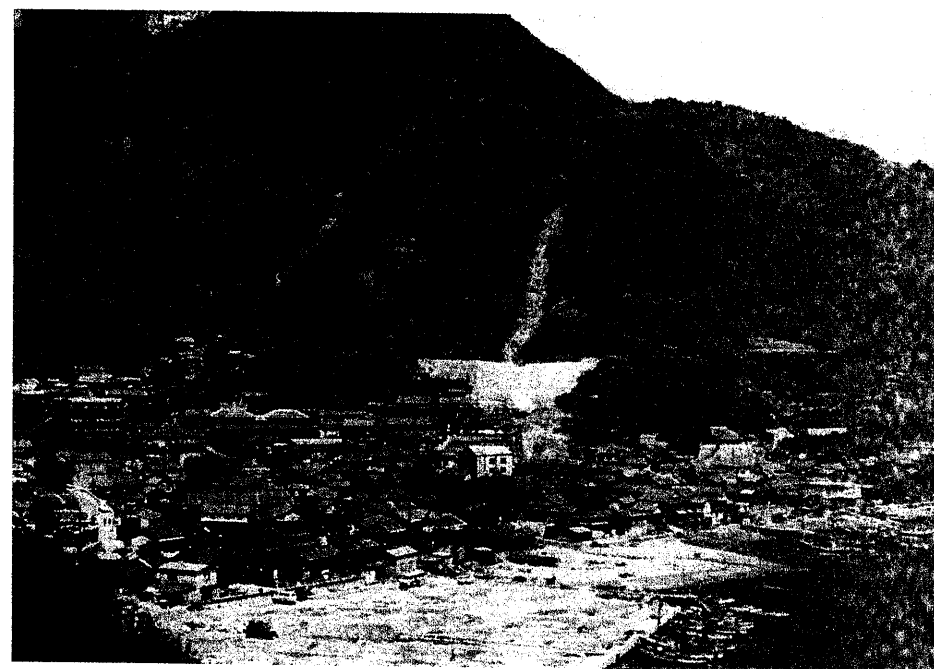
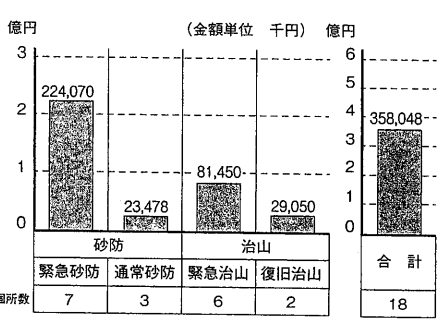
1. 町関係事業実施状況



2. 県関係事業査定額



3. 防災事業実施状況



橋地区
 山から流出してきた大量の土砂は、都市災害排土として使われ、新しく埋立地ができた。

苗羽地区の海岸にできた埋立地。

昭和 51 年の災害

49年災害の傷が癒えぬ間に来襲した 記録破りの集中豪雨 —池田町に大きな被害—

台風 17 号による 9 月 8 日から 6 日間におよんだ集中豪雨は、わずか 3、4 日で年間の雨量を上回る雨を降らせ、2 年前の 49 年災害ではほとんど被害を受けなかった池田町に死者 28 人という大きな爪跡を残した。また、49 年に激甚災害を受けた内海町では、住民の避難がいちはやく開始されるなど、49 年災害の教訓が生かされた地区もあったが、7 人（土庄町居住者 1 人を含む）が犠牲となった

〔災害の状況〕

数百年に一度あるかないかの豪雨、 9 月 11 日だけで年間雨量の約半分の降雨

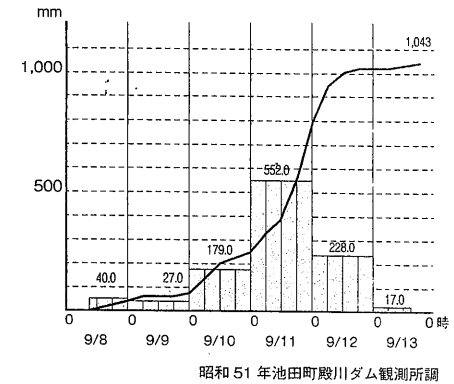
昭和 51 年 9 月 4 日午後 3 時に熱帯低気圧から台風となった 17 号は、大型の勢力を保ちながらゆっくり北上してきた。そして、10 日午後 6 時頃から 12 日午前 3 時頃まで鹿児島県の南西約 250 キロの海上に停滞したまま動かなくなった。このため、台風の東側にあたる香川県には南の湿った空気が流れ込み、県内全域に記録的な豪雨をもたらした。

小豆島では 9 月 8 日から雨が降り始め、8 日、9 日は雨量も少なかったが、10 日午前 4 時 30 分に大雨洪水警報が発令された後の午前 5 時から午前 7 時までに、池田町で 58 ミリの降雨を記録。11 日に入ってから時間雨量 20 ミリを超える降雨が断続的にあり、午後 0 時から午後 3 時までに 23 ミリ、39 ミリ、47 ミリと集中的な豪雨となり、急傾斜地の多い東部地域に山崩れ、河川の氾濫などの災害が発生した。

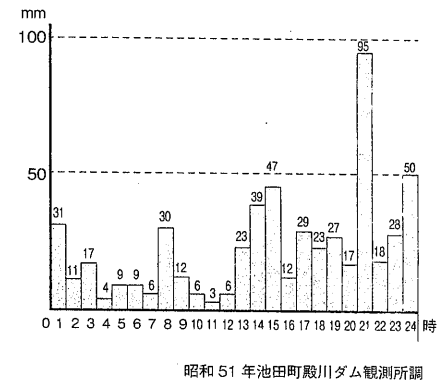
その後の午後 8 時から 9 時の 1 時間に、時間雨量 95 ミリを記録。9 月 11 日の 1 日だけで 522 ミリという、年間雨量の約半分近くの降雨をもたらした。池田大池の決壊、谷尻地区の山津波など、池田町全域にわたってかつてない大きな災害を引き起こした。

小豆島 災害の記憶

■台風 17 号 累加雨量および日降雨量



■台風 17 号 時間雨量
9 月 11 日 (0 時～24 時)



内海町でも 10 日の大雨洪水警報発令から、20 ミリを越す時間雨量が断続し、238 ミリとなった。11 日は最大時間雨量 94 ミリ、24 時間の雨量が 819 ミリという年間雨量に迫る豪雨となり、各所で土石流、崖崩れ、ため池の決壊や河川の氾濫などが頻発した。田畑の冠水、家屋の床上・床下浸水も多発し、草壁本町、安田、馬木地区では午前 1 時頃から 12 日夕方まで長時間にわたり、床上浸水が続いた。

8 日の降り始めから 13 日までの雨量は、四方指（池田町）の 1,400 ミリを最高に、内海ダム 1,281 ミリ、殿川ダム（池田町）1,043 ミリと 1,000 ミリを越え、1 年分がわずか 6 日で降ったことになる。この災害は、連続降雨量、日雨量、時間雨量などの記録を全て書き換えることとなった。内海町での 11 日に降った雨量は、何百年、あるいは千年に一度あるかないかの雨と専門家がコメントしている。

一般的に、日雨量が年間雨量の 1 割を超えると災害が起きるといわれている。51 年の大雨は、それを何倍も上回る記録破りのものとなった。

各地に避難命令が相次いで出され、 停電のなか住民は真夜中に避難を開始

9 月 10 日早朝の大雨洪水警報発令にともない、池田・内海両町において各課長および水防本部付職員が非常招集され、両町に水防本部が設置された。

池田町では消防団員・消防署池田分署員の水防活動が開始され、内海町においても小豆島消防署内海分署員および内海町消防団員を非常招集し、河川および危険箇所の巡視警戒を命ずるとともに、分団長の判断により住民に避難命令を出すよう指令がなされた。

内海町では雨の降り始めた 8 日頃から一部の地域で避難が始まり、10 日午後 4 時過ぎには橋地区の老人と子どもおよそ 100 人が改良住宅に自主避難するなど、10 日夜までにおよそ 4,700 人の住民



ボートで避難する安田地区植松の住民。

が避難した。

11日へと日付が変わるころ、島内各地から被害の報が続々と届き始め、午前1時には停電も発生した。

午前2時、池田町百尋地区では東浦公民館への避難が開始され、住民は激しく降る雨の中を、消防団員らの誘導によって避難所へ避難を始めた。

午前2時30分、内海町では全町に避難命令が出されたが、河川の決壊、氾濫による濁流で道路のいたるところが寸断され、広報車は走れず、各戸雨戸を閉めているため公民館放送は聞こえずらくと、避難伝達は徹底を欠いた。

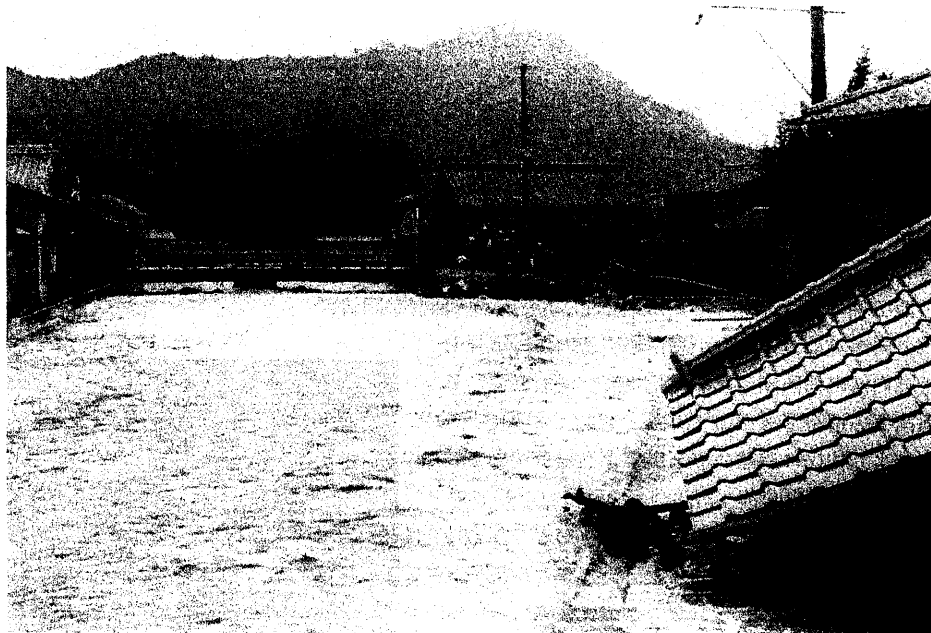
2時間後の午前4時40分には、池田大池の増水による避難準備を告げる放送が行われた。

同日午後2時30分石場地区住民の竹生公民館への避難に続き、池田大池決壊の恐れがでたため、付近住民に池田町公民館および池田中学校体育館への避難命令が発令された。午後3時過ぎ、室生大池崩壊の危険があるため池田公民館二生分館への避難の指示が出された。

同時刻、石場地区住民が内海町西村のオリーブ



救出され、ボートで避難する住民



池田大川の氾濫により倒れた家屋（迎地）



二面地区石場の土砂崩れ

丘に避難（午後7時過ぎ、星城小学校へ移動）。

同日午後5時過ぎには、当浜地区住民全員がゴルフ場へ避難。

池田町の対策本部に連絡のあった避難をまとめると、池田地区の2,874人を最大に、11日から14日までの4日間で5,689人が避難した。内海町では、11日と12日でのべ10,445人と多数が避難し、49年災害の教訓が生かされたことがうかがえる。

避難所では、停電、断水、電話の不通など、相次ぐ厳しい条件のもとでの共同生活を余儀なくされたが、不十分な毛布や食糧にもかかわらず、雨水をためて炊飯をしたり、赤ちゃんのミルク作り、おしめの洗濯などで助け合いながら避難解除の知らせを待った。

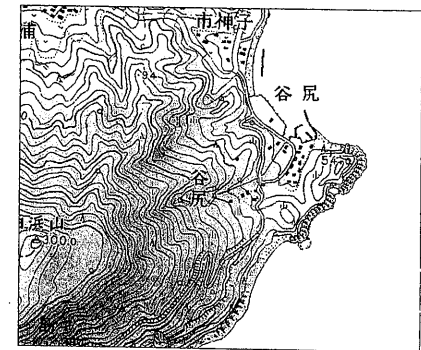
しかし、このときの避難体験から、3日分の食料品と水、一着分の衣料、基礎的な医薬品を持参しての避難が課題とされた。

谷尻地区の土砂崩れ



深夜近く、大音響の後に土石流にのまれた谷尻地区

9月11日午後8時過ぎに、赤坂地区で3回の土石流が起きたのに続いて、午後11時半頃、ドカーンという音とともに、大量の土砂と鉄砲水が34世帯、132人が暮らす谷尻地区を襲った。土石流は白浜山（301.7メートル）東斜面の山腹、標高150メートル付近の風化花崗岩の崩壊に始まり、流化する途中で谷の側壁の基部にたまっていた岩屑をとり込みながら土石流を大きくしていき、安山岩の大きな岩を土砂とともに押し流しながら、民家のみこみ、海岸の谷尻漁港西側にまで達した。

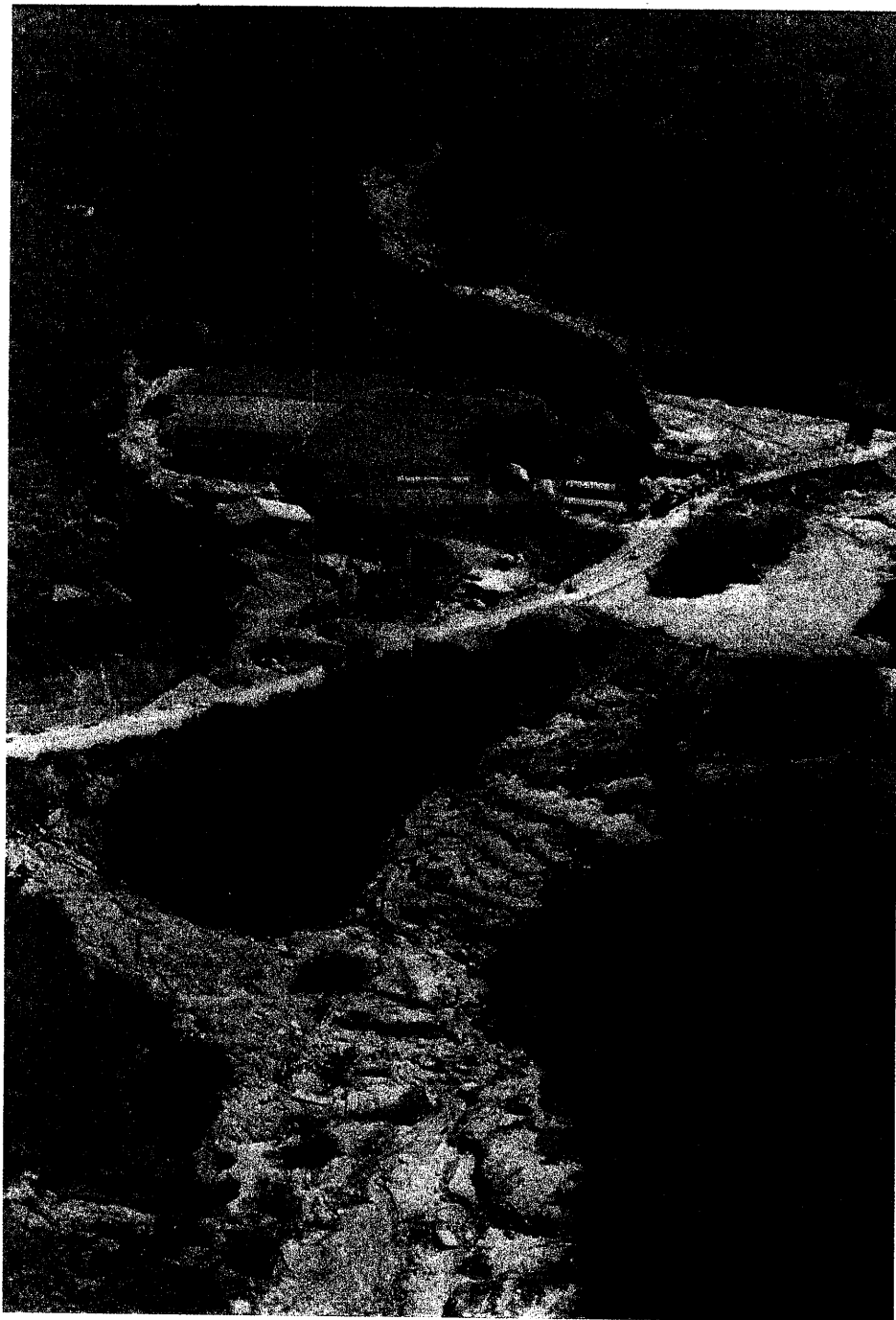


■谷尻地区

山の中腹からは幅約80メートルにわたって土砂や大石が流れ出て、それが家屋の上におおいかぶさった現場では、命からがら逃げ出した住民による救助活動が開始されたが、夜間でもあり、救助は難航した。12日には負傷者や生存者およそ50人が巡視船で救助された。

13日に海路から陸上自衛隊25人が上陸したほか、県警本部機動隊、地元消防団員らによる本格的な不明者の捜索活動が始まり、夜間も投光器を使った捜索活動が続けられた。

遺体発見の知らせが続くなか、13日昼前に崩壊家屋のすきまから姉妹が奇跡的に助けだされるといふ朗報も届けられた。



室生地区丸山付近の土砂崩れ

犠牲者の中には、豪雨について家々を回って避難を呼びかけた後、自宅で家族もろとも濁流にのまれた消防団員もいた。

2年前の災害の教訓が生きた橘地区は 人的被害なし

内海町では町内の4,741世帯の安全を守るため、1,583人の自治消防団員が避難誘導、防災作業、救援、救助にと活動を展開した。

なかでも、公設消防の設置がない橘地区では、多くの犠牲者を出した2年前の災害に学び、独自の自衛・防護活動を展開した。

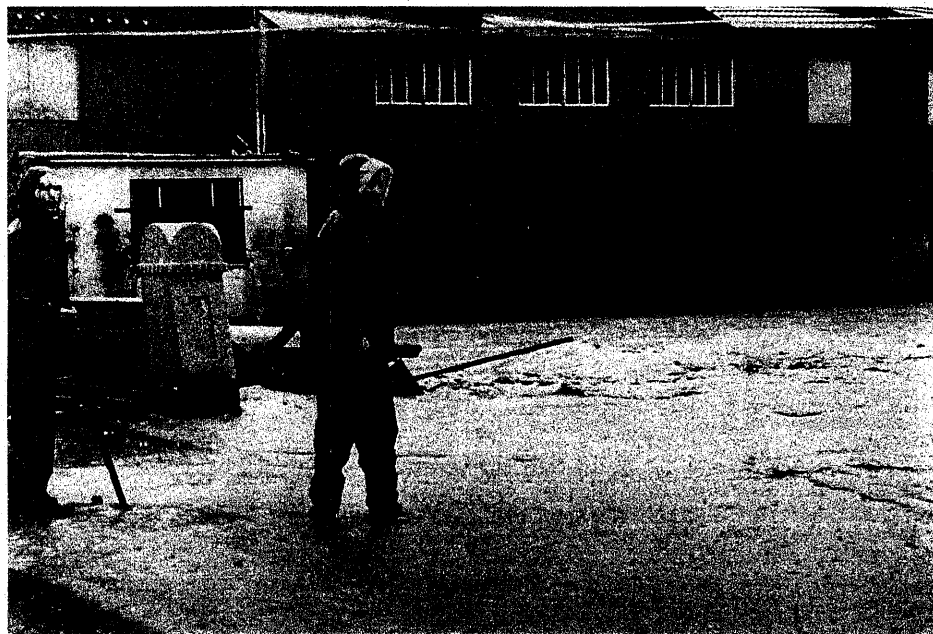
同地区では9月8日から雨が降り続いたが、大雨洪水警報が発令された10日早朝、指定の避難所へ移動を開始。午前7時には小学校休校が伝えられ、防護団員は警戒のため出動し、各所暗渠の点検および土砂の取り除き、1,000俵の土のう積みを行った。人身事故を起さないことを目標に、各戸へ避難勧告および誘導をし、午後3時には地区内約半数を各避難所へ避難させた。3時20分災害対策本部が設置され、団員は全員公民館で待機。

11日未明より土砂崩れ、家屋の流失、孤立等の連絡が相次いだが、いずれも無事救出し、負傷者は本町へ船の手配を依頼し病院へ搬送した。午前7時半、全戸に避難命令を出す。電話不通、停電のなか、9時に緊急の自治会役員会を開き、今後の対策および避難者の炊き出しなどについて相談がなされた。この時点での被害状況は全壊2戸、半壊5戸であった。避難をしぶる住民も連れ出すようにという指示のもと、病人および老人は戸板で避難誘導した。地区民全員が無事避難できたのは、午後1時のことであった。

その後、3地区で土石流が発生し、川沿いの家屋が流失し、全半壊18戸を数えた。避難があと1時間遅ければ、確実に犠牲者が出たであろうといわれる。橘地区では2年前の災害で得た尊い教訓により、人的被害を出さずにすんだ。



室生地区丸山付近の土砂崩れ



安田大川の氾濫（大川橋）

自衛隊へ災害派遣要請を行い、 本格的な救援活動が開始される

9月11日午前6時55分、香川県災害対策本部が設置され、小豆事務所に現地対策本部が置かれた。同日午前8時、内海町から自衛隊へ災害派遣要請をしたのに続いて、午前9時には県知事から善通寺の陸上自衛隊に対し、小豆島への災害派遣要請がなされた。

午後8時30分には、県知事が給水と救護物資輸送のため海上自衛隊へ要請。

9月12日午前1時30分に自衛隊が内海町に到着、ただちに安田大川決壊現場の調査応急復旧作業にとりかかった。

一方、池田町では陸上自衛隊が谷尻地区へ行方不明者救出に向かうなど、本格的な救援活動が開始された。

道路の通行不能に対処し、 荒れ狂う海で決死の救出活動

小豆島では島内を一周するように海沿いに道路がつけられているため、山崩れなどによる土砂の流入や倒木、損壊などで通行不能となる。このときの災害でも多くの道路が塞がれたため、

救援に駆けつけることができなくなり、集落の孤立が相次いだ。

こうした事態に、巡視艇などによる海からの救援活動が活発に行われた。

9月11日午後4時すぎには、西村竹生地区の負傷者を漁船が搬送し、避難民は巡視船で草壁港へ搬送された。

また、岩谷地区で起きた土石流で住民およそ90人が孤立したため、11日午後9時30分頃、海からの脱出を要請。海上保安部の巡視船「くまの」、巡視艇「きよづき」が12日午前0時すぎに岩谷沖に到着した。海上は13～15メートルの風で波が高いうえ、濁流が猛烈な勢いで陸から海に流れ込んでいるため、小型の作業艇による救出となった。暗闇の中、荒れ狂う海上への脱出に幼い子どもは泣き叫び、救助を拒む老人の姿も見られたが、小型艇による決死の救出作業は6往復繰り返され、見回りで集落に残る10人ほどを残し、住民80人が午前4時前、無事に巡視船に收容された。

翌12日には県水産指導船「ことぶき」が竹生へ出動、住民を救出した。また、高松海上保安部の巡視艇「たかなみ」が12日午後、家屋の下敷きで脊髄を損傷した女性を高松へ移送。安田、片城地区においても孤立者救助のためゴムボートで救助隊が出動した。吉田地区には海上自衛隊の掃海艇が向かい、13日午後には巡視艇が堀越地区で救助活動にあたるなど、陸路を断られた地区の住民が続々と海路で避難した。

また、救援物資の多くは漁船などで海路、避難所へ運び込まれるなど、その後も海からの支援が続けられた。

警報解除後に行われた 給水、診療、救援物資の輸送

9月13日、午後0時30分に大雨洪水警報が解除された。



内海町役場へ避難する住民



自衛隊員に抱えられて避難する子ども



負傷者を運ぶ



吹き出しに追われる給食センター職員

午後3時には台風は隠岐島の北90キロメートルへ去り、四国地方での降雨はほとんどなくなった。

昼過ぎに自衛隊歩兵部隊128人が到着、直ちに行方不明者捜索を開始した。

午後1時30分、内海町に出されていた避難命令解除。

翌14日、早朝より消防署員、団員らが行方不明者捜索活動に入るとともに、被害調査も開始された。

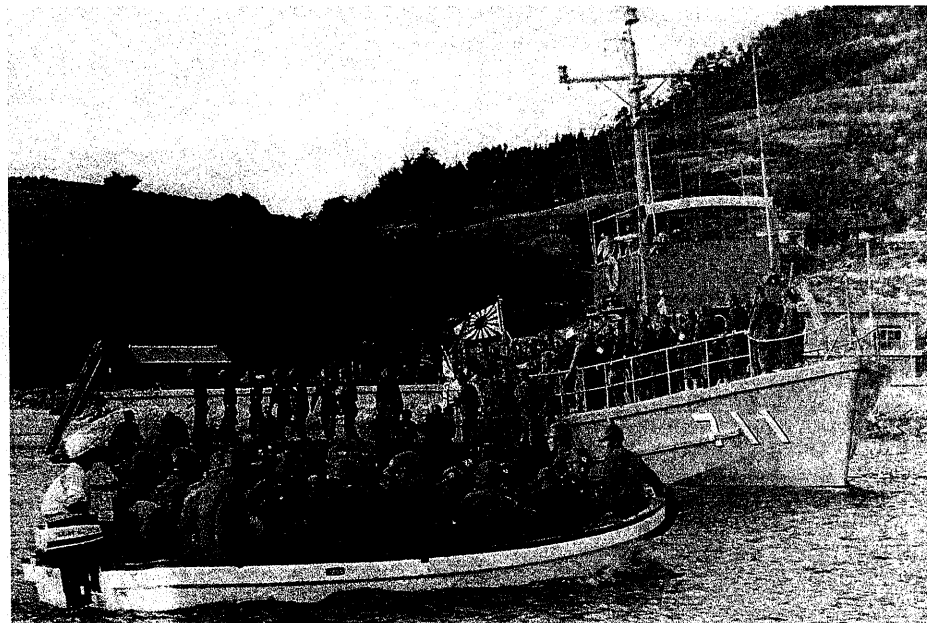
海上自衛隊給水船など5隻のほか8隻が増援で出発。陸上自衛隊小豆地区増援部隊が現地へ入った(隊員600人、車両65台)。

診療船「さぬき丸」「済生丸」の二隻による被災住民の診療も開始された。社会福祉法人済生会の診療船「済生丸」は、医師2人、看護婦4人を谷尻地区に送り込み、約50人の診療を行った。

15日に入ると県災害対策本部の給水船が派遣され、救援物資が届けられた。

災害後ただちに救援救出および災害復旧作業に従事した自衛隊も9月20日から逐次撤収が行われ、21日には自衛隊施設大隊、22日に自衛隊歩兵大隊が任務を終えて引き揚げた。

池田町で9月9日から23日まで15日間に活動に参加したのべ人数は、自衛隊が3,670人、警察機動隊1,092人、消防団1,957人である。



救援活動に向かう自衛隊員(谷尻地区)



ヘリコプターで救援物資を運ぶ(谷尻地区)

〔被害の状況〕

「1400ミリの爪跡」と形容された
さまざまな大災害が、
全域に広がる

9月8日の降り始めから13日までの雨量が、最高1,400ミリというとてつもないものになったことから、島内各地で土石流や山崩れが発生し、ため池や河川の堤防決壊や氾濫、およびそれらによって引き起こされた家屋倒壊や浸水、冠水などの被害が全域に広がった。被害総額も膨大で、池田町4,810,023千円、内海町は8,363,201千円となった。

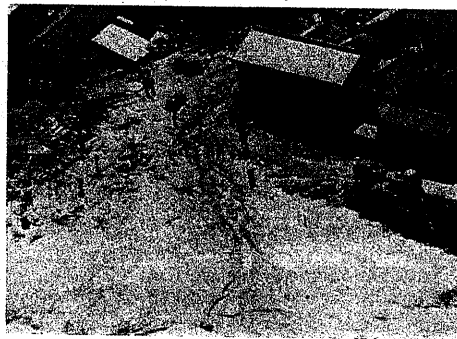
主な地区の被害は次のようなものである。

池田町

・南蒲野地区

同地区は三都半島の南東部に位置し、山地の東側斜面の山麓から海岸にかけて4集落が分布する。死者24人という今災害で最大の人的被害を出した谷尻集落が含まれる。

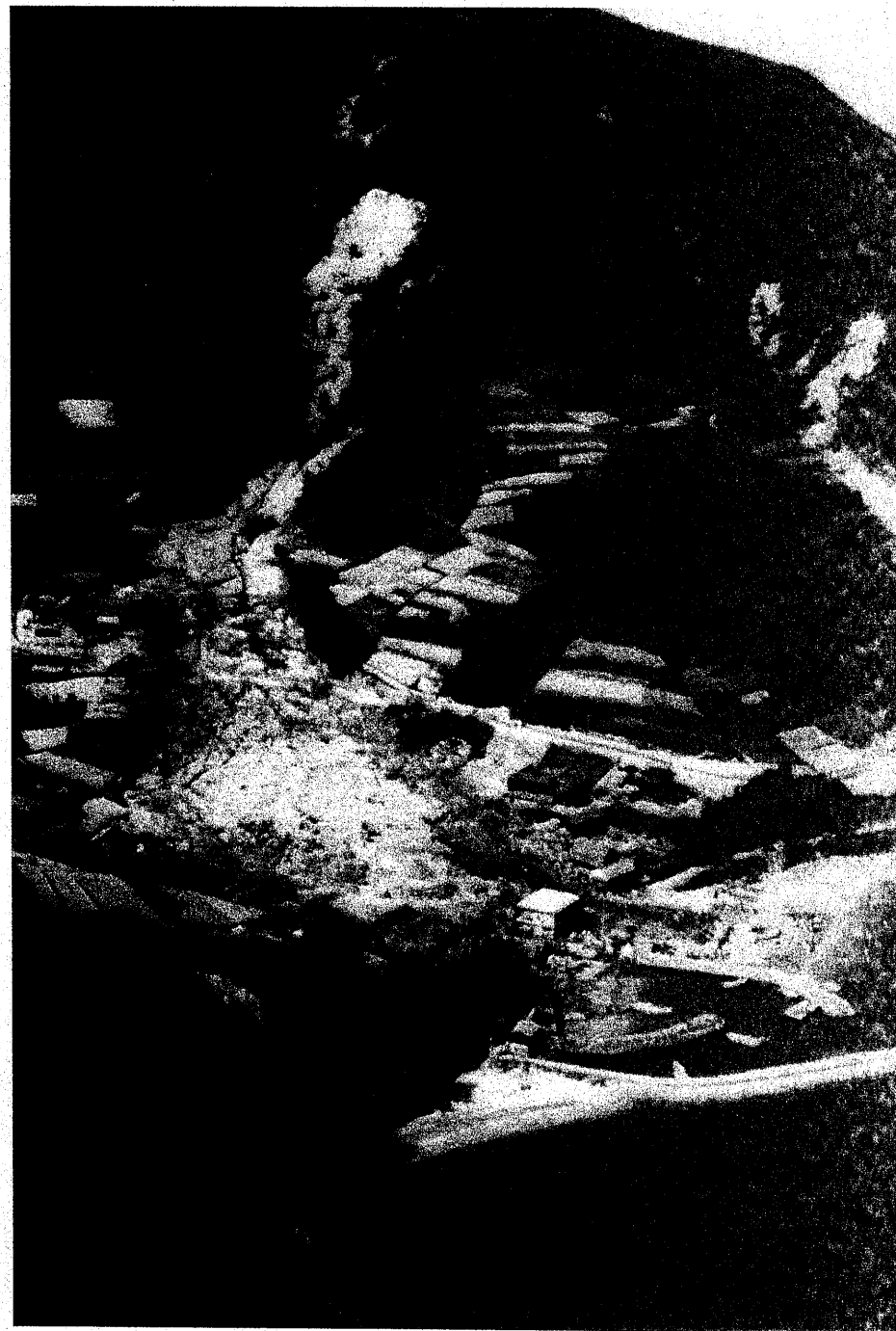
同地区では山崩れ、土石流による被害や床下浸水などの被害が発生した。ことに谷尻集落では山麓斜面の崩壊や土石流による被害が大きく、死者に加えて重軽傷者8人、全壊家屋20戸など被害が大きかった。



すべてを押し流した土石流のすごさ (三都半島)



土石流で破壊された家や家財が、海まで流された (三都半島)

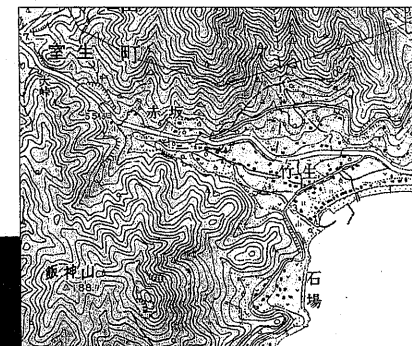


上空から見た蒲野地区 (谷尻) の状況

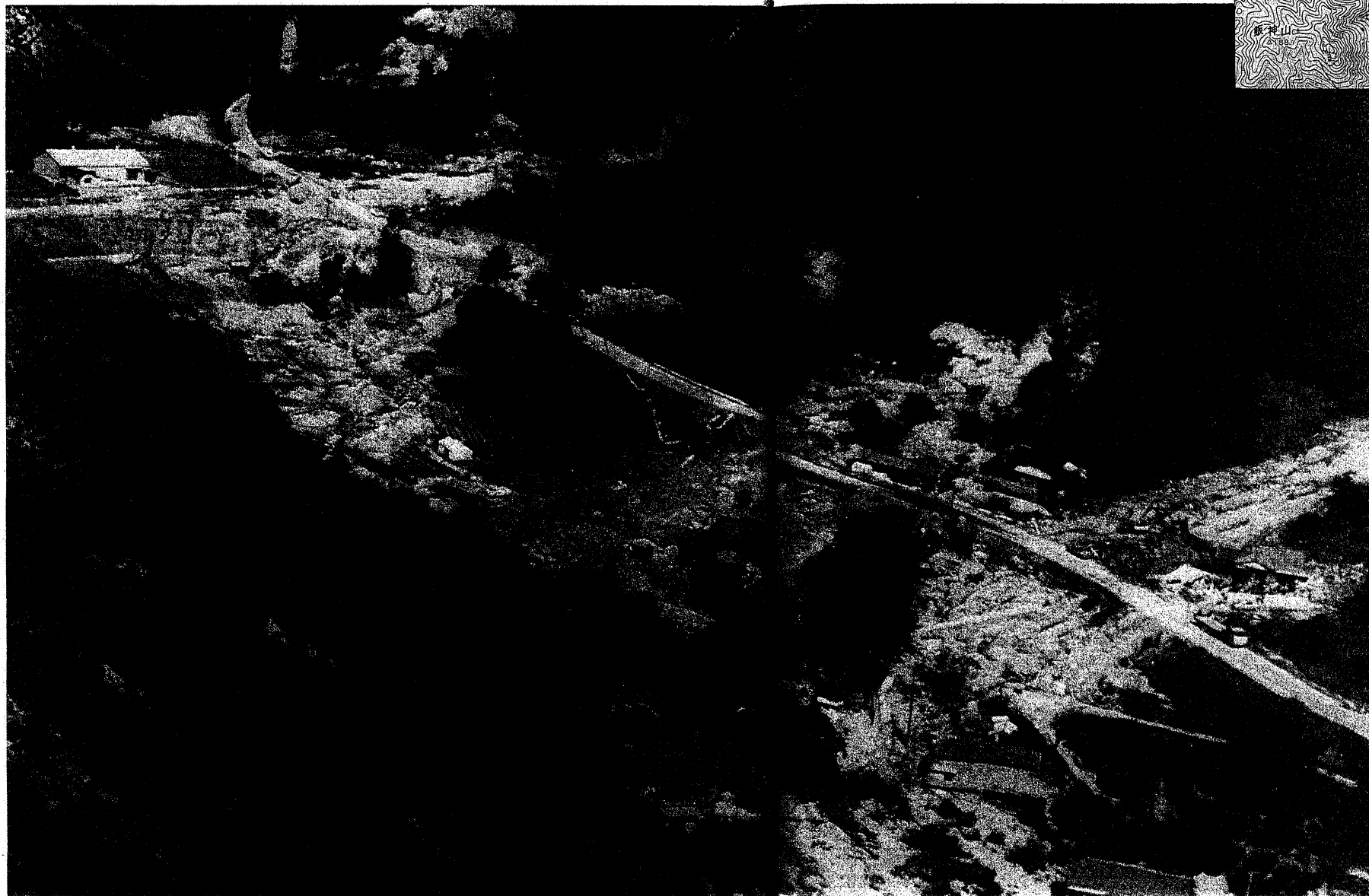
・室生地区

三都半島の付け根部分に位置する室生地区。豊栄川下流で池田湾に面する集落では床上・床下浸水、山崩れ、土石流による被害が見られた。死者4人となった赤坂集落では、小さな谷に沿って流れ出た土石流の被害が大きかった。

重軽傷者9人のうち赤坂集落は8人。全壊家屋12戸のうち10戸が赤坂集落である。床上・床下浸水家屋は137戸であった。赤坂集落での人的被害と家屋被害は谷尻地区に次ぐものとなった。



■室生地区



室生地区赤坂の土砂崩れ



まるで石の洪水（石場地区）

・二面地区

三都半島の尾根を境に、西の池田湾に面した地域と東の内海湾に面した地域に分かれる。

池田湾に面した地域では山崩れ、土石流の他に床上・床下浸水による被害が発生した。一方の内海湾に面した地域では山崩れなど土砂災害がみられ、ことに花崗岩の巨大な岩石が多く存在する石場集落で被害が大きかった。大きいものは2メートルにおよぶ岩石を含んだ土石流が石場地区の集落を襲い、家屋を破壊して大きな被害を出した。ことに、山火事の跡地での崩れが大きかった。

人的被害は重軽傷者3人、家屋の被害は全壊12戸（うち石場集落6戸）、半壊8戸、一部破損家屋5戸、床上・床下浸水は117戸であった。

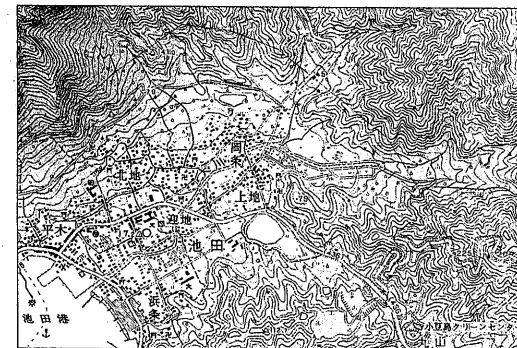
・迎地地区

池田大川の流域で、電照菊栽培などを行っている農家が多い。豪雨とそれによる大池の堤防決壊、池田大川の堤防決壊による床上・床下浸水、農地の冠水による被害が大きかった。人的被害は重軽

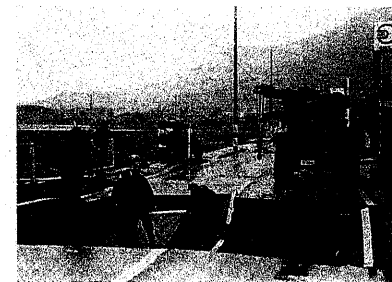


石場地区

傷者2人。全壊家屋は1戸にとどまったが、床上浸水家屋46戸、床下浸水家屋52戸。鉄骨ビニールハウス栽培による電照菊は壊滅的な被害を受けた。



池田地区



道路が陥没した（迎地地区）



川ようになった道路（浜条）



電照菊畑に流れ込む濁流

内海町

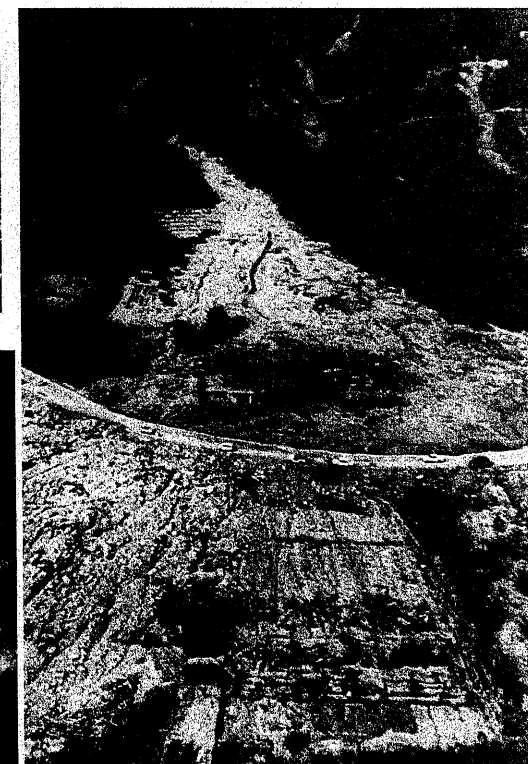
・西村地区

64戸が暮らす竹生地区では、9月11日午後9時前に土石流が発生し、24戸が被害を受け、6人（土庄町居住者1人を含む）が死亡した。同地区では山崩れも多発し、地区全体の重軽傷者は25人、家屋の全壊は54戸、半壊28戸で、床上・床下浸水187戸であった。

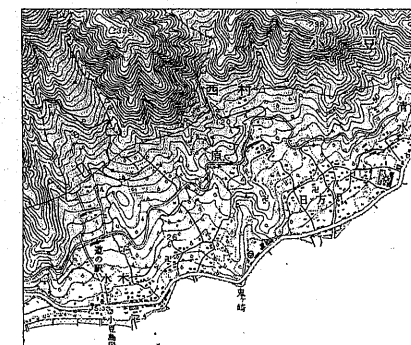
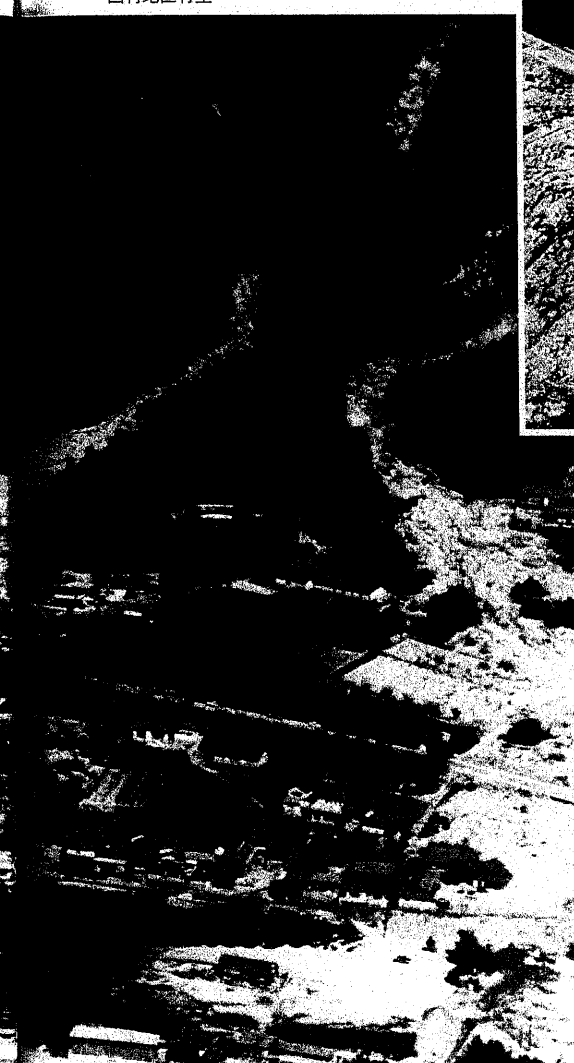
西村地区竹生



西村地区竹生



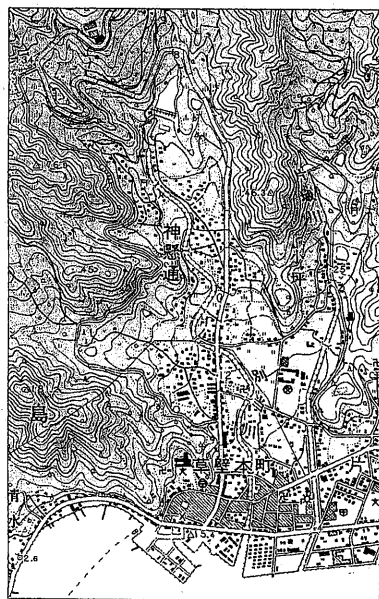
扇状に広がる西村地区の土砂崩れ



■西村地区



西城川流域の土石流被害 (神懸通)



■神懸通地区

・神懸通地区

同地区では山崩れ、土石流などが発生し、土石流による家屋被害は21戸におよび、立恵地区では49年災害に続いて地すべりが起きた。地区全体では重軽傷者10人、全壊4戸、半壊22戸、床上床下浸水254戸を記録した。

・草壁本町地区

草壁本町で午前1時頃から12日夕方までの長時間にわたり洪水が発生。半壊は7戸、床上浸水が182戸、床下浸水も138戸を数えた。

・草壁本町南地区

同地区も浸水が著しく、床上浸水170戸、床下浸水30戸を数えた。

・片城地区

同地区も浸水被害が大きく、ことに内浜1区では70戸全戸が浸水被害にあった。地区全体では重軽傷者5人、半壊家屋2戸、床上浸水183戸、床下浸水50戸となった。



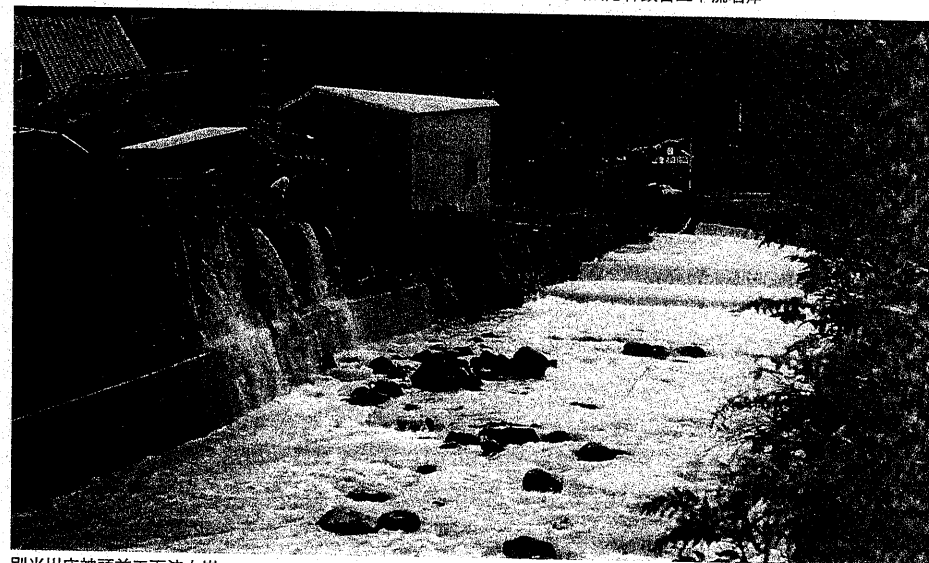
■草壁本町地区 片城地区



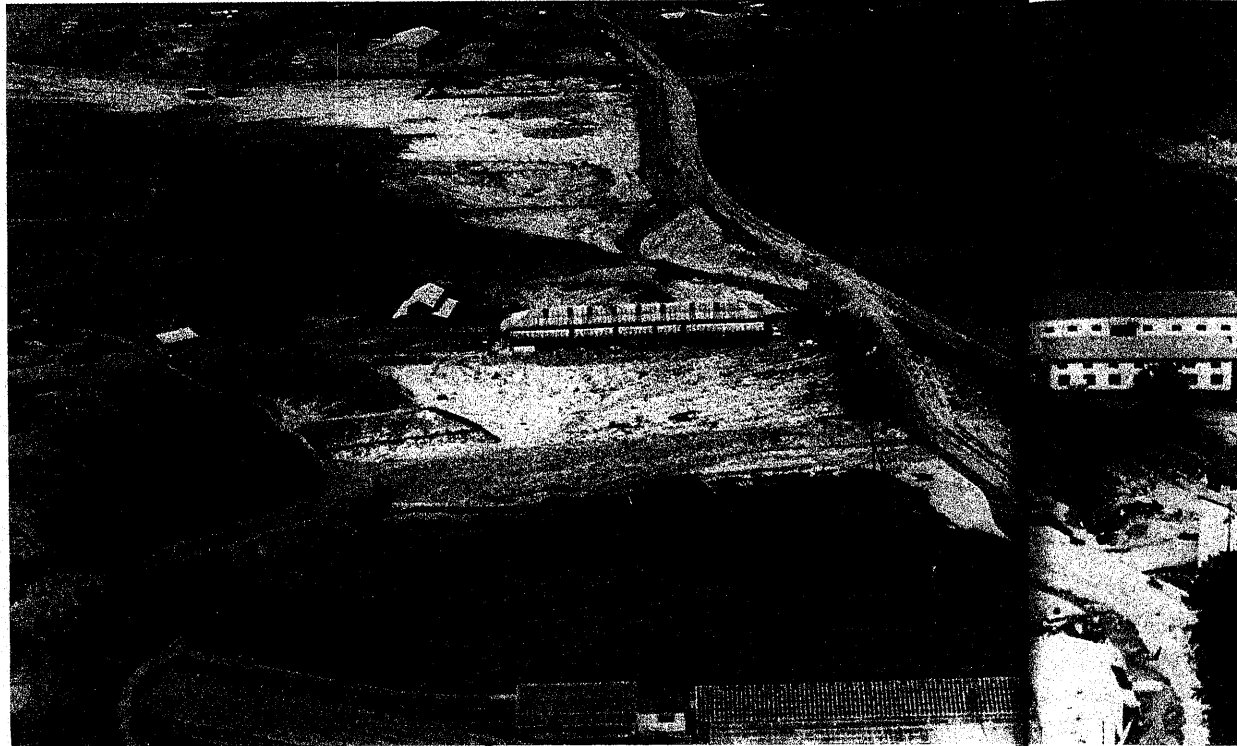
別当川の氾濫



別当川応神頭首工下流右岸



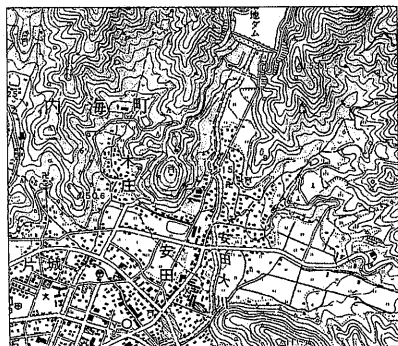
別当川応神頭首工下流右岸



安田大川の氾濫 (安田古郷水路)

・安田地区

9月11日、12日と安田大川が決壊したため、床上浸水が長時間にわたり、浸水被害が大きかった。そのほか、山崩れ、土石流被害もあり、下条地区では山崩れで5戸、土石流で40戸が被害にあった。地区全体では軽傷者2人、全壊5戸、半壊15戸、床上浸水384戸、床下浸水92戸である。



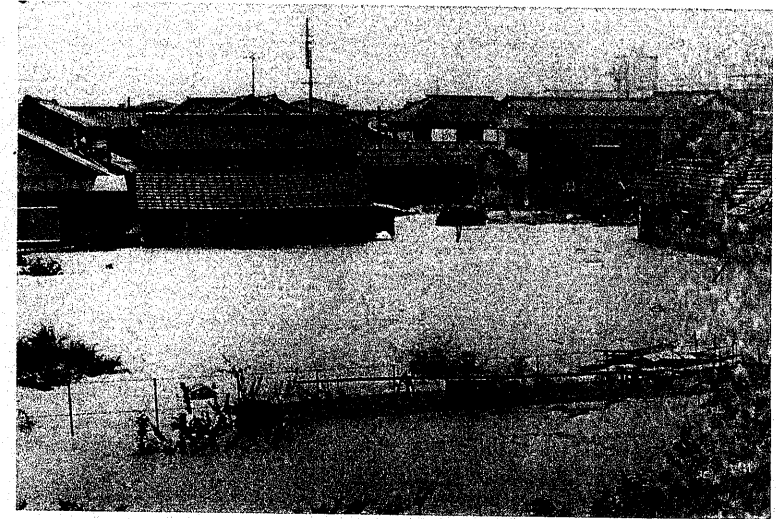
■安田地区

・橋地区

9月10日夕方から自主避難が始まった。夜半には、土石流による住家の流出が起こった。早朝には、地区住民全員に対し避難命令が出された。

・岩谷地区

9月10日から被害が出始め、11日早朝に家屋倒壊により重傷者2人が出た。地区住民90人が孤立状態となったため、海上保安署が救出活動を行った。



安田大川決壊による冠水 (安田地区)

・馬木地区

低地帯が多いため、浸水被害が著しく、床上浸水242戸、床上浸水154戸を数えた。また、土砂崩れ等により全壊9戸、半壊3戸の被害であった。

・苗羽地区

9月10日の早朝から、崖くずれ等による被害が続出。全壊13戸、半壊15戸、床上浸水96戸、床上浸水103戸を数えた。

・福田地区

9月11日未明に浸水被害が始まり、土石流で民家が流出。1人が死亡した。地区全体では、重傷者3人、全壊19戸、半壊7戸、床上浸水41戸、床下浸水153戸である。



安田大川・清光橋 (安田地区)



安田交差点から西側の浸水状況

山腹や山麓斜面や谷底など、 地盤の弱いところで多数の犠牲者

池田町での死者は28人に及び、そのうち24人が南蒲野地区の谷尻集落の住民で最も多い。また4人の死者は室生地区の赤坂集落の住民であった。いずれも三都半島地域であり、山腹や山麓斜面や谷底など地盤の弱いところに立地していた集落の被害が大きかった。

重軽傷者数は池田町26人で、谷尻集落の8人を含む南蒲野地区は10人、赤坂集落8人を含む室生地区で9人、二面地区は3人であった。

内海町での死者は7人（うち1人は土庄町在住者）で、6人は西村地区、1人は福田地区で被災した。重軽傷者は54人で、こちらも西村地区が最多であった。

全域にわたった建物被害、全壊家屋は187戸

池田町の全壊家屋は60戸に及んだ。南蒲野地区21戸（谷尻地区20戸）、室生地区12戸（赤坂地区10戸）、二面地区で12戸（このうち石場地区6戸）となっており、以上の3地区で全壊家屋が多かった。

半壊家屋は、池田町全体で42戸、一部破損家屋は22戸で、これらは南蒲野、室生、二面、中山など各地区でみられた。

床上浸水家屋は池田町全体で469戸、床下浸水家屋は1,026戸に及び、全町にわたった。

内海町の全壊家屋は127戸と池田町を上回り、西村地区の54戸が突出している。半壊家屋137戸、床上浸水1,543戸、床下浸水1,191戸であった。

道路、通信、電気、水道などライフラインが寸断され、 混乱をきたす

・交通

定期路線バスは9月13日に小豆島全線が運休したが、その後の県道の復旧とともに回復し、坂手・土庄間は10月1日、草壁・福田間は10月30日に完全復旧した。翌年7月1日には小豆島一周定期観光バスが復旧した。

土砂崩れや陥没などで各所が寸断された道路網だが、県道小豆島循環線（現国道436号）は9月26日、県道三都港平木線9月21日、県道蒲野内海線（現県道蒲野西村線）9月17日、



丸山付近の道路陥没

県道神浦吉野線9月22日、県道上庄池田線が9月24日に通行制限解除となった。

・通信

池田町は9月15日時点で429回線が被害を受けた。復旧が急ピッチで進められた結果、9月19日には全線復旧した。

一方内海町では、市内電話2,544回線が被害を受けた。もっとも被害が深刻だった福田局では、9月11日午後2時頃までに、内海向けと土庄向けの幹線ケーブル2本300回線が土砂崩れで断線となったため、災害用の孤立無線を運用し、1回線を確保して陸の孤島化を防いだ。

問い合わせのほとんどが内海町災害対策本部へかけられたものの、役場電話交換室も浸水して7回線のうち4回線が通話不能となったため、当初は常時話し中の状態となり、大変混乱した。

無料の特設公衆電話が内海局窓口ほか6か所、計18個が設置され、住民の利用を助けた。市内電話は9月24日の段階で99パーセントが仮復旧している。

・電気

池田町では、東浦、室生丸山で9月11日真夜中に起きた供



浸水の中での給水活動

給障害を最初に、室生、二面、長崎、小蒲野、蒲野、吉野、南蒲野、神浦、中山、小豆島ヴィラなどで電線断線と電柱倒壊が起き、その他の地域でも12日にかけて電線の断線が相次いだ。

小豆島全戸で電力が復旧したのは9月16日である。

・水道

池田町では殿川ダムの完成にともない、各地区の簡易水道は中山簡易水道を除いて廃止され、昭和50年より一部地域を除く全町で給水が開始された。

しかし、この災害で9地区すべての水道施設は被災し、最も復旧が早かった室生地区が9月14日、翌15日には蒲生地区が復旧したが、全面復旧までは日数がかかり、池田地区の完全復旧は10月4日であった。

慢性的な水不足の内海町は、上水道は別当川・安田大川などのほか、約10キロメートルの導水管で東北端の吉田川からも送水している。台風17号により吉田川からの導水管は寸断され、三五郎池その他の貯水池は土石流に埋まり、簡易水道も各所で被害を受け、9月11日から14日は完全断水となった。

住民に恐怖と危険をもたらしたため池の決壊

ため池が多数存在する小豆島では、この災害で165池が被災した。このうち内海町68池(41.2パーセント)、池田町は24池(14.5パーセント)であった。

被災内容では土砂流入が最も多く、内海町では51池、池田町では18池に土砂が入った。下流域に大きな被害を与える原因となる決壊は、内海町で21池、池田町では9池であり、香川県下でもその割合は群を抜いて多く、小豆島におけるため池災害の激甚さを物語っている。

ため池の決壊は、池田町では池田大池、二面大谷池、池田巽池、二面化池、吉野賢東池、吉野新池、蒲野大池の8か所である。ことに9月11日午後9時頃に決壊した広さ2,733平方メートル、貯水量8万トンほどの池田大池の決壊により、下流付近の家屋はほとんど床上浸水の被害を受けた。

ため池はこれまで利水面だけでなく、洪水調整という治水面でも重要な役割を果たしてきたが、その機能をはるかに超える豪雨により、下流域の住民に恐怖と危険をもたらしたのである。



池田大池の決壊

池田町における橋梁損壊は池田千軒橋、八千代橋、迎地橋の3か所であったが、内海町では11か所の橋梁が被害を受けた。

河川の氾濫、決壊も多発した。

小豆島の河川は小規模なものが多い。川幅が狭いうえに浅く、急カーブが多いため、200～300ミリの雨で危険な状態になる。記録破りの豪雨で、こうした脆弱な体質が露呈した。

延長2,500メートル、流域面積6.9平方キロメートルにおよぶ池田大川は、山から押し流された土砂で河床が上がり、水かさが増えて12日夜に決壊した。

内海町では延長3,200メートルの安田大川、苗羽地区を流れる中筋川などが氾濫、決壊し、あふれ出た水が下流域に浸水や田畑の冠水、流出、埋没などの被害をもたらした。

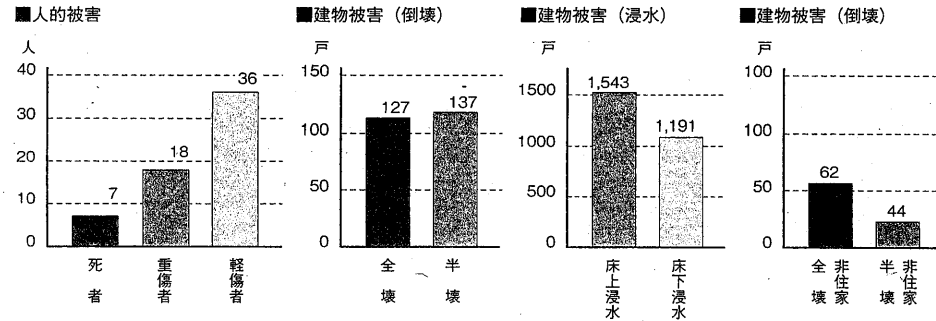
安田大川の決壊、氾濫により、内海病院や中学校などのある町の中心一帯は水につかり、内海町役場前の県道(現国道)は水深およそ1メートル、川沿いの商店街は1.5メートルほどとなった。川に沿った県道(現国道)は川となり、濁流が渦巻いた。

土砂崩れは、9月10日早朝の目見ヶ谷など各所で起き、両町合わせて390か所にのぼった。県道蒲野石場線(現県道蒲野西村線)や町道谷尻白浜線(4か所)など、各所で道路が寸断した。

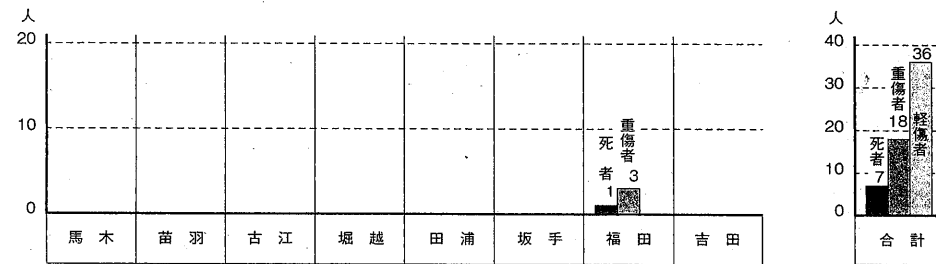
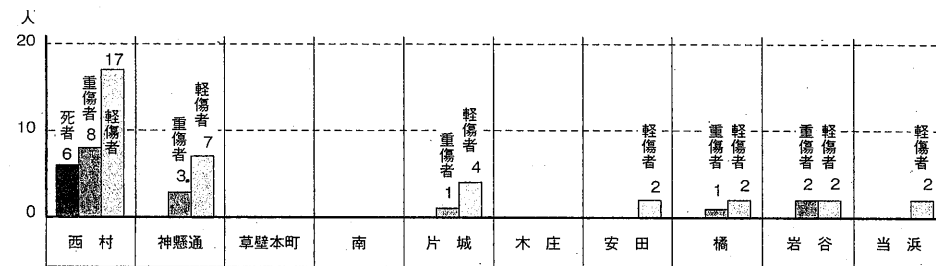


植松馬場(安田地区)

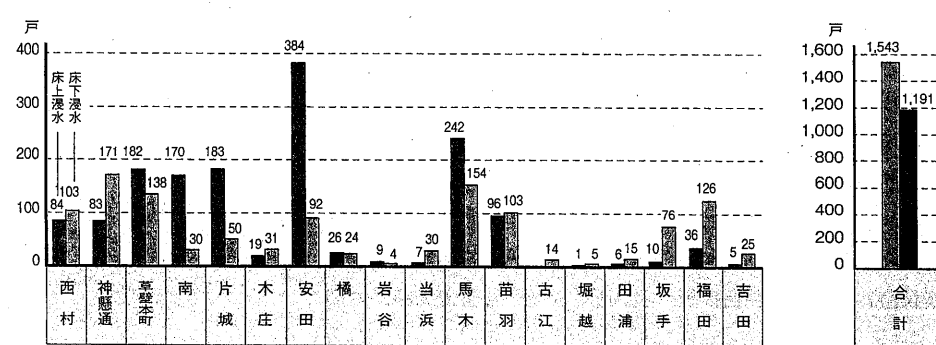
データでみる昭和51年の被害の状況 (内海町)



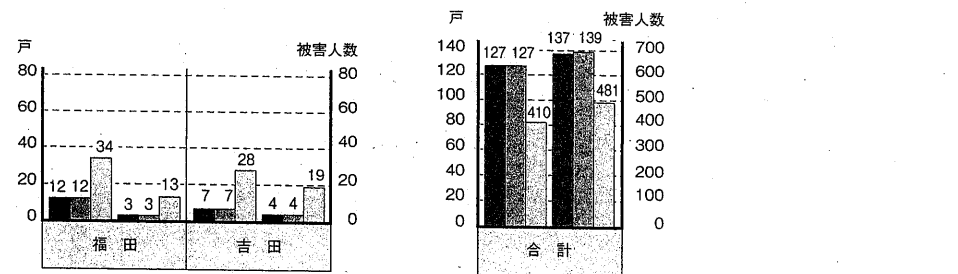
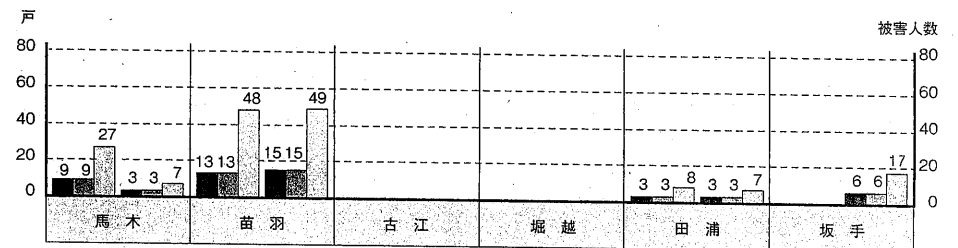
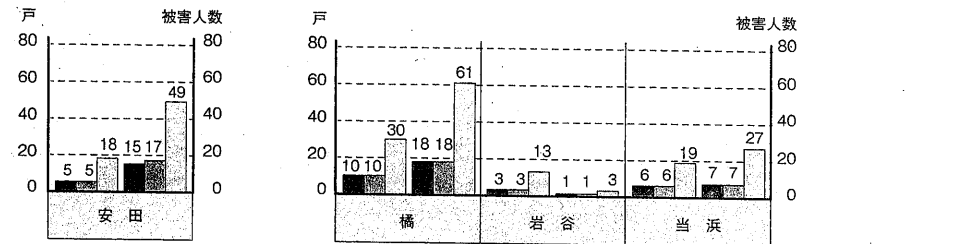
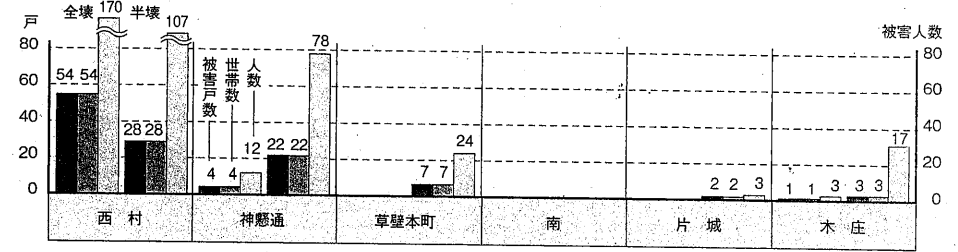
■地区別人的被害状況



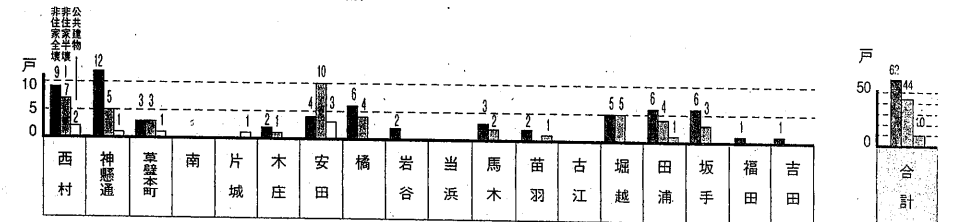
■地区別建築物被害状況 (住家浸水)



■地区別建築物被害状況 (住家倒壊・損壊)

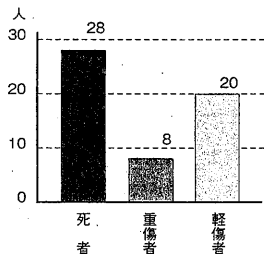


■地区別建築物被害状況 (非住家・公共建物)

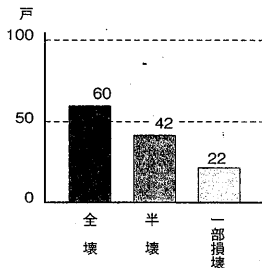


被害の状況 (池田町)

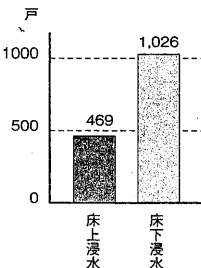
■人的被害



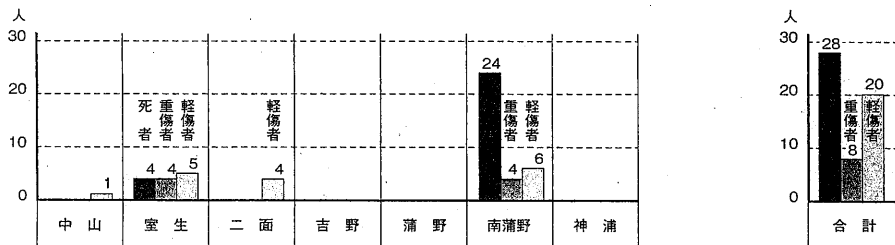
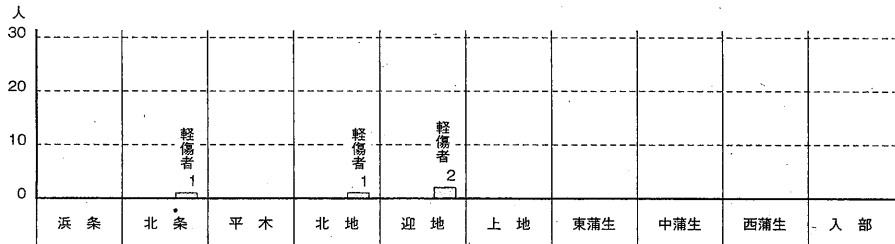
■建物被害 (倒壊)



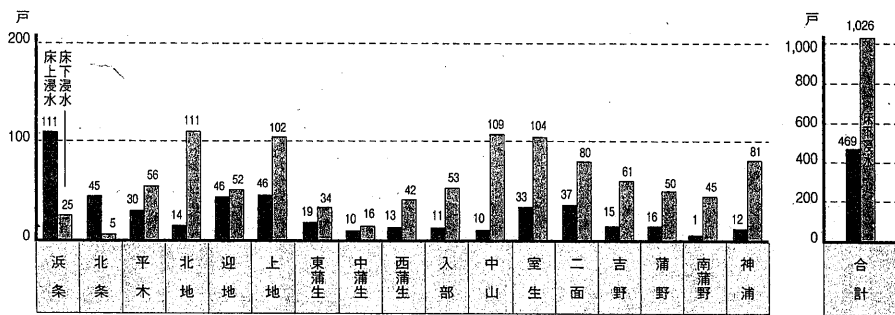
■建物被害 (浸水)



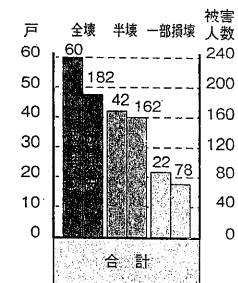
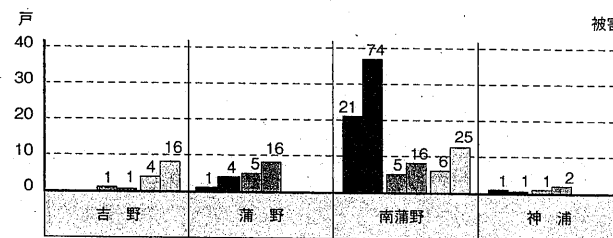
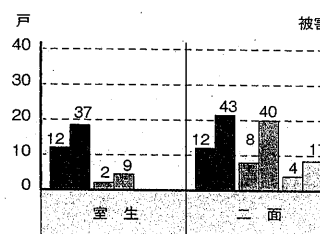
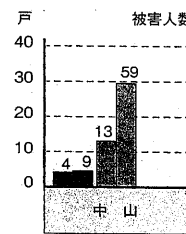
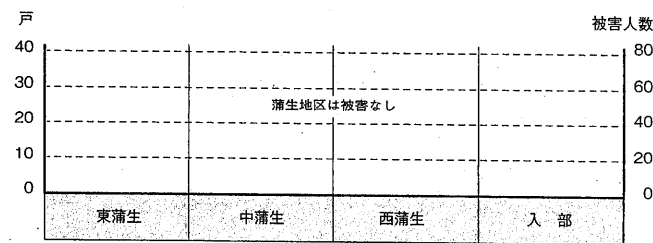
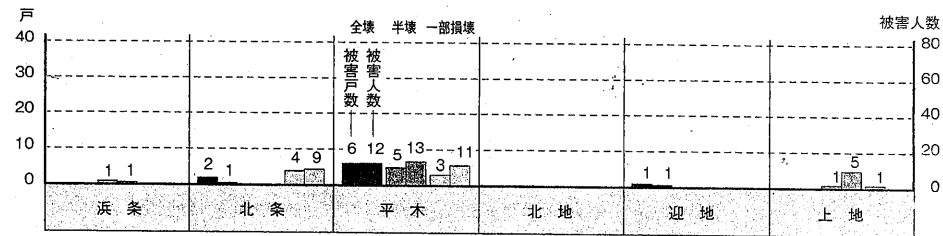
■地区別人的被害状況



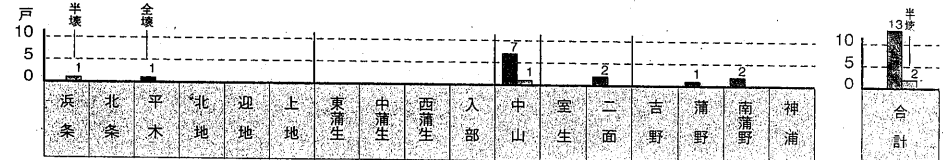
■地区別建築物被害状況 (住家浸水)



■地区別建築物被害状況 (住家倒壊・損壊)



■地区別建築物被害状況 (非住家)



地場産業「電照菊」880万本が被害、被害金額5億円と痛手も大きく

冠水や土砂流入などによる池田町での農地の被害は全域にわたったが、ことに全国でも有数の特産品である電照菊の被害は甚大だった。

電照菊は池田大川流域の谷底平野や氾濫原地帯において、鉄骨ビニールハウスが建設され、栽培されていたが、大雨やそれによる堤防の決壊、河川の氾濫により、多くの農地が冠水し、土砂に埋まった。ことに池田大池の決壊で、池田地区一帯の電照菊畑は土砂に埋まった。

専業農家およそ300戸のうち3分の1が菊主体の経営という池田町では、約40ヘクタールの電照菊栽培面積のうち、55パーセントにあたる約22ヘクタールが冠水などによる被害を受け、被害金額は3億円に達した。また、年間生産本数は約1,600万本だが、半数にあたる880万本の被害となり、被害金額は5億円超とされた。(52年度から二カ年計画で、第二次農業構造改善事業による電照菊栽培の立て直しが図られた)

また、小豆島は全国屈指の醤油生産を誇るが、最大手の丸金を含む醤油醸造業の26社が集中する内海町では、半数の13社が被害を受け、町内メーカーの被害総額は1億4,800万円に達した。

馬木地区では工場が倒壊したほか、各所で製品や製造用具が冠水するといった被害を受けた。だが、この時期は醤油生産のピーク時から外れており、仕込みを休んでいたところも多かったために、原料や製品の被害が少なかったのは不幸中の幸いであった。

とはいえ、記録的な豪雨のために、被害メーカーのほとんどが4日から1週間程度の操業停止を余儀なくされ、出荷の遅れが生じた。

一日も早く学び舎へ。
自家用車や漁船で送迎し、
先生は泊まり込みで授業再開

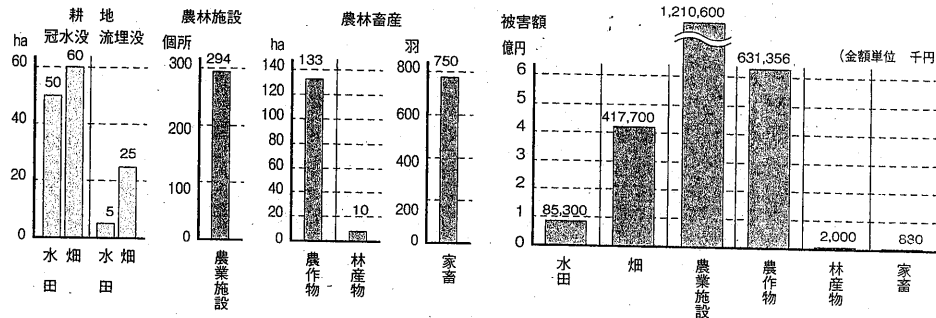
池田町内の6幼稚園、5小学校、1中学校でも休園・休校が相次いだ。9月11日には蒲生幼稚園・蒲生小学校を除くすべての園と小中学校が休園・



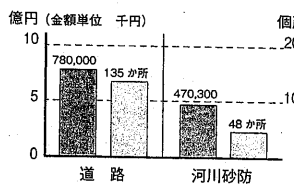
工場被害

被害の状況(池田町)

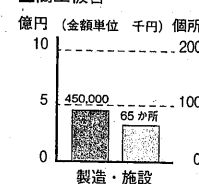
■農林被害



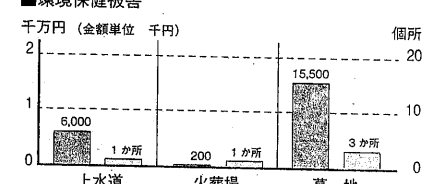
■土木被害



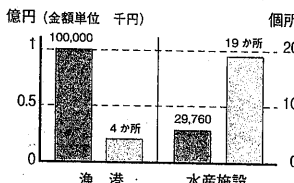
■商工被害



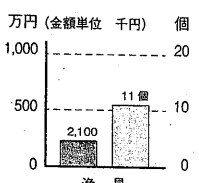
■環境保健被害



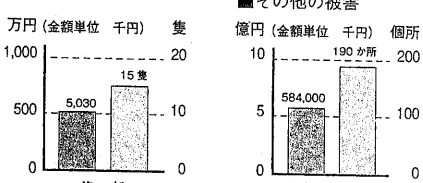
■水産被害



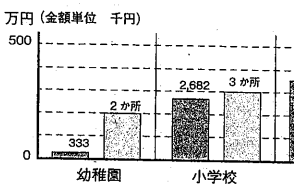
■漁具



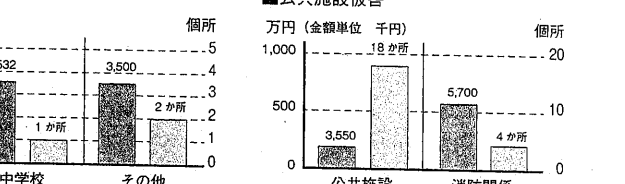
■その他の被害



■文教施設被害



■公共施設被害

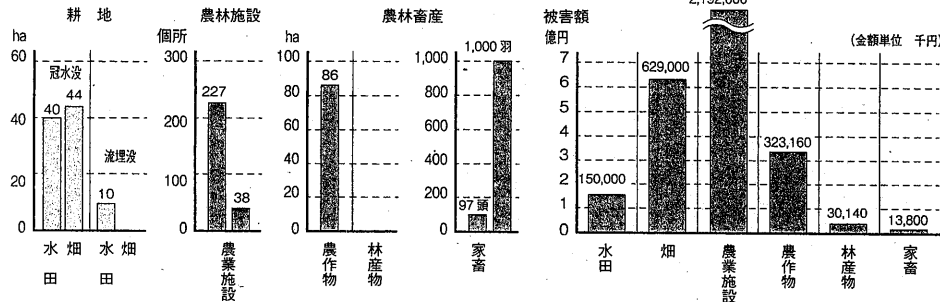


被害総額

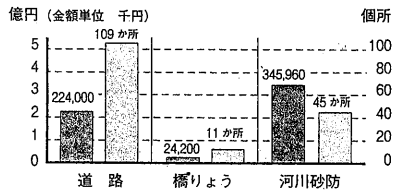
| | | | |
|--------|-------------|--------|-------------|
| 農林被害 | 2,347,836千円 | 文教施設被害 | 10,047千円 |
| 土木被害 | 1,250,300千円 | 公共施設被害 | 9,250千円 |
| 商工被害 | 450,000千円 | その他の被害 | 584,000千円 |
| 環境保健被害 | 21,700千円 | | |
| 水産被害 | 136,890千円 | 合計 | 4,810,023千円 |

被害の状況 (内海町)

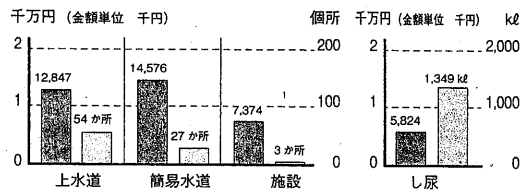
■農林被害



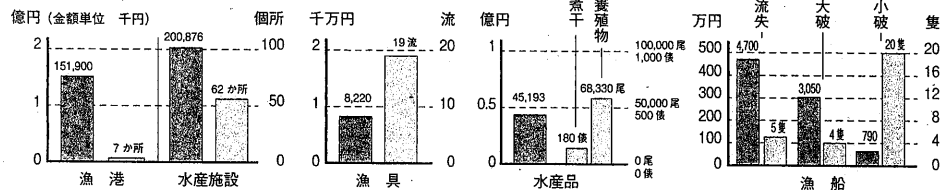
■土木被害



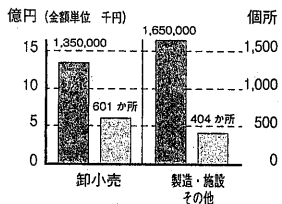
■環境保健被害



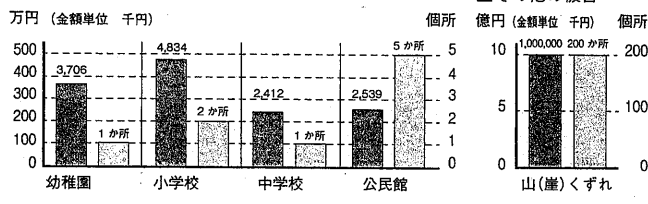
■水産被害



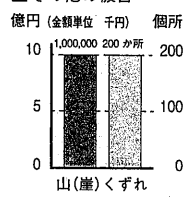
■商工被害



■文教施設被害



■その他の被害



被害総額

| | | | |
|--------|-------------|--------|-------------|
| 農林被害 | 3,296,100千円 | 文教施設被害 | 13,491千円 |
| 土木被害 | 594,160千円 | その他の被害 | 1,000,000千円 |
| 環境保健被害 | 140,621千円 | | |
| 水産被害 | 421,829千円 | | |
| 商工被害 | 3,000,000千円 | 合計 | 8,363,201千円 |

休校となり、建物にも被害を受けた。

9月13日の警報解除から正常化の動きが急速に進み、幼稚園では14日の蒲生幼稚園を最初に、被害の少ない所から正常化が進み、9月20日の三都幼稚園および神浦分園を最後に幼稚園は正常化した。

小学校は、中山小学校が14日に正常化した。他校は半日授業や分散授業が行われ、最後となった三都小学校では22日に正常化した。

町内唯一の池田中学校では11日からの休校は17日には半日授業となったが、正常化は22日まで待たなければならなかった。

内海町では、町内の7幼稚園、4小学校、1中学校は11日から休園、休校となった。道路の損壊で車の通行ができなくなった田浦地区の子どもたちは16日から3日間、「岬の分教場」で知られる旧苗羽小学校田浦分校で授業を行った。教諭はモーターボートで岬に通った。

安田小学校に通う岩谷・橋地区の1、2年生は橋の旭幼稚園、3年生は橋公民館の小集会室、4～6年生は改良住宅と、それぞれ仮教室で勉強を続けるなど苦労を重ねたが、自家用車や漁船で送迎した保護者、現地に泊りこんだ先生などの協力により、小中学校では早期に分散授業が開始された。福田・苗羽小学校では9月20日には授業が正常化、他校もそれに続いた。



避難状況

【急ピッチで進められた応急対策】

台風17号は甚大な災害を引き起こして、ようやく北へ去った。

大きな痛手を受けた住民は行政、消防団、警察、自衛隊、近隣市町村の応援隊とともに、応急対策に追われた。

11トンダンプカー1日160台で運搬し、1年間を費やす膨大な堆積土砂とゴミ

町全域にわたったゴミ、ヘドロはもとより、倒壊家屋、住宅地域での流入土砂の取り除き作業が、住民および自衛隊を含めた町外からの応援により行われた。

池田町では土砂、ゴミは災害復旧工事により出される土砂とともに平木地区、谷尻地区で埋立処理した。埋立量は、平木地

区で約152,000立方メートル、谷尻地区では約71,000立方メートル、合計約223,000立方メートルとなった。

内海町では、49年災害のとき埋立が行われた苗羽、草壁埋立地と片城地区の空地など8か所の仮置場へ運搬集積した。

仮置きしたゴミ、土砂は80,000立方メートル（49年災害30,000立方メートル）にも達し、これと災害復旧工事によって排出される土砂270,000立方メートル、合わせて350,000立方メートルの対策として、苗羽宮山海岸に埋立て処理した。ちなみに、350,000立方メートルの土砂は、11トンダンプカー（6立方メートル積載）で1日160台運搬して、1年間を費やす量である。

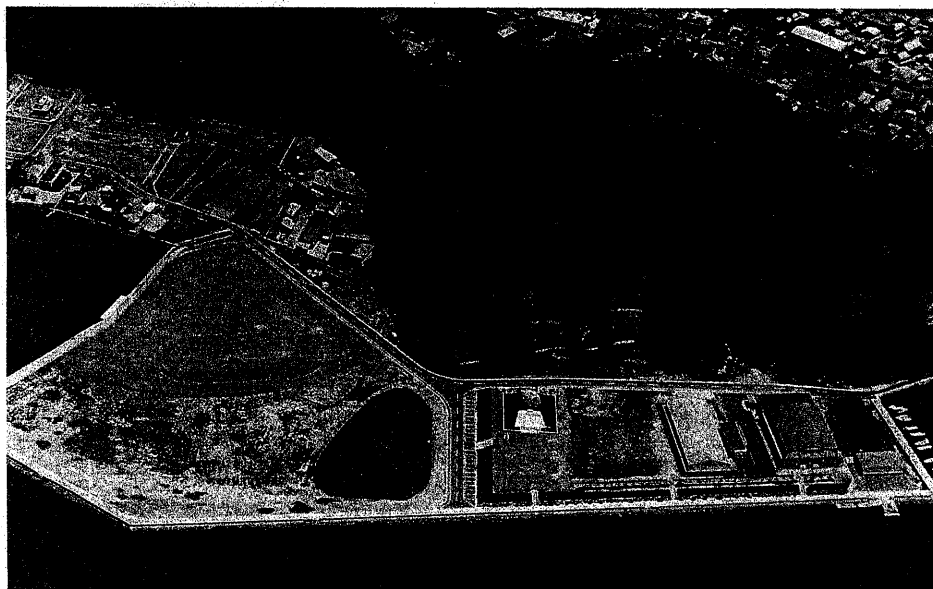


水害の片付けで発生したゴミの仮置き場

衛生面から対策が急がれたし尿処理

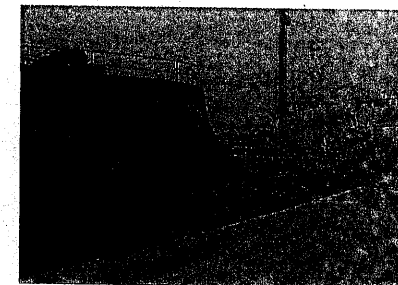
衛生上早急に処理しなければならないし尿については、町外からの応援、協力などにより、9月30日までにはほとんど処理することができた。

池田町では、収集戸数795戸、収集量446,500リットルのうち、処理船による海洋投棄が377,370リットル、土庄し尿処理場で68,130リットルを処理した。



災害残土による埋立地にできた内海総合運動公園

内海町においても、9月30日までに処理は完了した。処理場であるみさき園は、土砂流入のためにポンプ室をはじめ施設のほとんどが被害を受けて運転不能となったため、大川郡の大川地区広域行政振興整備事務組合の協力により、バジー船1,000トンと230トンの2隻を借り上げ、海洋投棄を行った。



し尿のバジー船への搬入

環境悪化による病気の発生を予防

家屋への土砂の流入、浸水などによって衛生環境が悪化し、食中毒、赤痢などの伝染病の発生が予想された。

池田町においては、地区住民および町外からのボランティアらにより、地区内の薬剤散布、井戸水の消毒、検査活動に加えて、保健婦による食生活、生活環境の防疫指導を行い、伝染病および他の病気の発生予防に努めた。

予防機材は動力噴霧器4台、肩かけ手押し3台。使用薬品は消石灰160袋（20キログラム入り）、クレゾール420本（0.5リットル入り）、オルソー剤60缶（18リットル入り）、ハイクロン5箱（16キログラム入り）であった。

内海町では、9月14日から9月20日の1週間に町内全域（浸水地域）の薬剤散布、および各家庭への配布を実施した。噴霧機は県、観音寺市、善通寺市、土庄町から7台の提供を受け、この間の作業のべ人員は、自衛隊員128人のほか、三豊郡大野原町からの26人をはじめ、団体、業者などからの奉仕者は84人となった。

散布および配布した主な薬品は、オルソー剤488缶（18リットル入り）と800本（500ミリリットル入り）、クレゾール15缶（18リットル入り）と940本（500ミリリットル入り）、ハイクロン55箱（20キログラム入り）、消石灰100袋にものぼった。

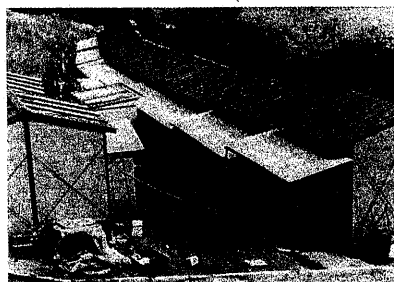
また、自家水利用者のための井戸水検査は、10月20日までの1カ月間にわたり土庄保健所で実施され、1.8リットル瓶341本の水質検査を実施した。

応急仮設住宅を建設し、家屋を失った人に提供

全壊家屋60戸、半壊家屋42戸、その他町内のほとんどの家



西村地区竹生に建築中の仮設住宅



建設された仮設住宅

屋が被害を受けた池田町では、家屋を失って生活に困惑している住民に対して、町内7か所に44戸の応急仮設住宅を建設した。町内における仮設住宅建設は9月20日の谷尻地区17戸、石場地区8戸を皮切りに、建設用地は隣接地区の民有地を町が借り上げ、県に提供する形で始まった。

内海町での応急仮設住宅建設は、9月18日の着工以来、町内13か所で次々と実施され、10月28日までにすべての入居を済ませた。

仮設住宅はプレハブづくりで、1戸あたりの基準面積は23.1平方メートル、間取りは6畳、4畳半の2DKが標準となっている。

上水道源の三五郎池は貯水不能、内海ダムにも土砂流入、水道施設は49年を上回る大被害

池田町での給水車による給水期間は9月15日

から28日までの14日間におよび、自衛艦による運搬も9月17・20日の2回行われた。そのほか、土庄町からの運搬や、町の井戸水を使用するなどして水道施設の復旧を待った。

内海町の水道施設は49年の災害をはるかに上回る大被害となり、9月11日から14日までは完全断水となった。15日から試験通水を開始したが水道管の破損がひどく、19日になってようやく通水することができた。

しかしながら上水道源の三五郎池は土砂で埋没して貯水不能となり、一方の内海ダムも多量の土砂が流入したため貯水事情は悪化し、終日通水が実施できたのは10月9日の降雨以後となり、1か月間にわたり厳しい給水制限を余儀なくされた。

災害援護資金の貸し付けなど、生活の立て直しを援助

被災した人々の暮らしを援助するため、池田町では災害援護資金制度が設けられ、3年据置、年3パーセントの利率で災害援護資金の貸し付けを受けることができ、合計96件、5,200万円が貸し付けられた。

内海町では、被災1か月後の10月12日から、西村地区を皮切りに町内11か所で災害相談所を開設し、町長以下各課長が出向いて町再建への建設的な意見を聞いた。

また、災害援護資金の貸付が行われ、412件、1億7,990万円が貸し付けられたほか、町民税等の減免も実施された。

■ 応急仮設住宅建設状況

